椿市廃寺 II

行橋市文化財調査報告書

第 24 集

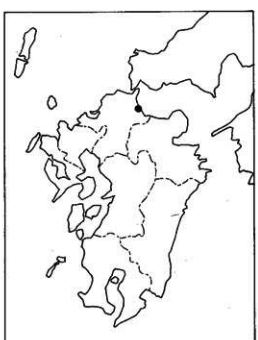
1996

行橋市教育委員会

椿 市 廃 寺 Ⅱ

行橋市文化財調査報告書

第 24 集



1 9 9 6

行橋市教育委員会

1．椿市廃寺周辺航空写真

2．椿市廃寺周辺ほ場整備状況

1．椿市廃寺寺域周辺（東から）

2．椿市廃寺講堂跡（北から）

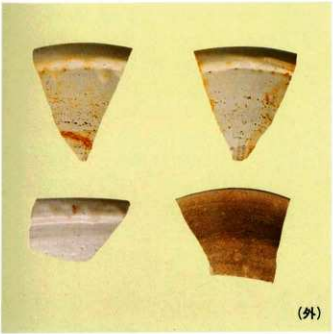
1．　講堂基壇北西隅部（西から）

2．　講堂跡北側木材集中地点（北から）

1．椿市廃寺出土軒丸瓦

2．椿市廃寺出土軒平瓦

1．椿市廃寺出土陶器



2．椿市廃寺出土磁器

序

椿市廃寺は現在市指定史跡でありますが、これまですでに三回にわたって遺跡確認のための発掘調査が行われ、特色ある伽藍配置や多様な出土瓦により、広く研究者の間で注目されてきた遺跡であります。平成４年度にこの重要な遺跡の一部が県営ほ場整備事業の対象となったことから、工事予定範囲についてあらためて発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、講堂の基壇の一部や回廊と思われる遺構が新たに検出され遺跡の重要性がさらに高まりました。

市教育委員会としては、文化遺産としての椿市廃寺の重要性に鑑み、工事の設計変更をお願いし、保存の措置を講ずることができました。

この間、地元地権者の方々、県行橋農林事務所、椿市土地改良区のみなさまには何かとご迷惑をおかけしたにもかかわりませず、文化財保護に向け多大なご理解とご協力をいただき感謝にたえません。

最後になりましたが、調査や保存に関しては、栗原和彦調査課長をはじめとする九州歴史資料館及び、県教育委員会文化課の方々に終始あたたかいご指導をいただきましたことに対し深く感謝の意を表します。

平成８年３月

行橋市教育委員会

教育長　白　石　　壽

例　　言

1．本書は行橋市教育委員会が県営ほ場整備事業にともない国、県の補助金を受けて平成４年度に実施した椿市廃寺の発掘調査の報告書である。

2．本書は昭和52、53、54年度の発掘調査にもとづき昭和55年に刊行された報告書『椿市廃寺』と区別するために報告書名を『椿市廃寺Ⅱ』とした。

3．現地での調査は九州歴史資料館調査課長栗原和彦氏の指導を受け、行橋市教育委員会社会教育課の小川秀樹、村上智恵子が行った。

4．遺構図は栗原、小川、村上、井無田栄子、三井恭子、坂本千恵子、国永敏枝、森脇勢津子が実測した。

5．出土遺物は村上、伊藤昌広、内本康代、下原由紀子が実測した。

6．遺構写真は主として小川が、遺物写真は伊藤が撮影した。空中写真はフォトオオツカによる。

7．遺構、遺物の製図は、村上、伊藤、内本、佐藤裕子が行った。

8．本書の執筆は下記のとおりである。

第Ⅰ章……小川秀樹
第Ⅱ章……小川秀樹
第Ⅲ章……小川秀樹
第Ⅳ章 1……小川秀樹
　　2……村上智恵子
　　3……村上智恵子・伊藤昌広・中原　博
第Ⅴ章……村上智恵子・中原　博
第Ⅵ章……小川秀樹
付　編……栗原和彦

9．本書の編集は、栗原調査課長の指導のもと小川と村上がこれにあたった。

本文目次

第Ⅰ章　調査にいたる経過…… 1

第Ⅱ章　位置と環境…… 3

第Ⅲ章　調査の概要…… 6

第Ⅳ章　寺院関係の調査
1．寺域の調査（Ⅰ～Ⅴ区）…… 8
2．寺院北東部の調査（Ⅶ区）……16
3．遺物……23

第Ⅴ章　その他の遺構と遺物
1．遺構……58
2．遺物……58

第Ⅵ章　小結……63

付　編　椿市廃寺出土の単弁八弁軒丸瓦……66

挿図目次

第1図　椿市廃寺周辺の主要遺跡分布図（1/80,000）…… 4
第2図　調査区位置図（1/1,000）…… 7
第3図　講堂基壇北西隅部実測図・土層図（1/50）…… 9
第4図　Ⅲ区1トレンチ東壁土層図（1/50）……10
第5図　Ⅰ～Ⅴ区遺構配置図（1/300）……折り込み
第6図　講堂跡北側木材集中地点実測図（1/40）……11
第7図　Ⅱ区1トレンチ西壁土層図（1/50）……12
第8図　回廊跡実測図（1/100）……13
第9図　1号掘立柱建物跡柱掘形断面図（1/50）……14
第10図　4号掘立柱建物跡実測図（1/50）……14
第11図　Ⅴ区4トレンチ実測図（1/100）……15
第12図　5号掘立柱建物跡実測図（1/50）……17
第13図　6・7号掘立柱建物跡実測図（1/50）……18
第14図　Ⅶ区遺構配置図（1/200）……折り込み
第15図　1・2号井戸実測図（1/40）……19
第16図　3号井戸・1号土坑実測図（1/50）……20
第17図　土坑群（2～19号土坑）実測図（1/100）……21

第18図　5・7号土坑実測図（1/40）……21
第19図　20号土坑実測図（1/40）……22
第20図　出土軒丸瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）……24
第21図　出土軒丸瓦Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類拓影・実測図（1/4）……25
第22図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）……26
第23図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）……27
第24図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）……28
第25図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）……29
第26図　出土軒平瓦Ⅱ類拓影・実測図（1/4）……30
第27図　大分廃寺軒平瓦拓影……32
第28図　出土平瓦拓影・実測図（1/4）……33
第29図　出土平瓦拓影・実測図（1/4）……34
第30図　出土平瓦・丸瓦拓影・実測図（1/4）……35
第31図　出土丸瓦拓影・実測図（1/4）……36
第32図　出土鴟尾・その他の瓦類拓影・実測図（1/4）……37
第33図　Ⅱ区出土土器実測図（1/3）……40
第34図　Ⅲ区出土土器実測図（1/3）……41
第35図　Ⅳ区出土土器実測図（1/3）……42
第36図　Ⅴ区出土土器実測図（1/3）……43
第37図　Ⅶ区柱穴・1号井戸出土土器実測図（1/3）……44
第38図　Ⅶ区3号井戸出土土師器実測図（1/3）……45
第39図　Ⅶ区3号井戸出土須恵器実測図（1/3）……46
第40図　Ⅶ区3号井戸出土須恵器実測図（1/3）……47
第41図　Ⅶ区1号土坑出土土師器実測図（1/3）……48
第42図　Ⅶ区1号土坑出土須恵器実測図（1/3）……49
第43図　Ⅶ区土坑群出土土器実測図（1/3）……50
第44図　出土墨書土器実測図（1/3）……50
第45図　出土陶磁器実測図（1/2）……52
第46図　出土木製品実測図①（1/3）……53
第47図　出土木製品実測図②（1/12、1/8、1/4、1/2）……54
第48図　出土金属製品実測図（1/2、1/1）……56
第49図　出土銅銭拓影（1/2）……57
第50図　出土塑像螺髪実測図（1/1）……57
第51図　出土鞴羽口実測図（1/3）……57
第52図　方形周溝実測図（1/50）……59
第53図　方形周溝出土土器実測図①（1/5）……60
第54図　方形周溝出土土器実測図②（1/3）……61
第55図　その他の遺物（1/3、1/1）……62

第56図　椿市廃寺推定伽藍模式図（1/600）……64

表　目　次

第１表　土坑群計測表……22
第２表　軒平瓦Ⅰ類計測表……31

図版目次

巻頭図版１　１．椿市廃寺周辺航空写真
　　２．椿市廃寺周辺ほ場整備状況
巻頭図版２　１．椿市廃寺寺域周辺（東から）
　　２．椿市廃寺講堂跡（北から）
巻頭図版３　１．講堂基壇北西隅部（西から）
　　２．講堂跡北側木材集中地点（北から）
巻頭図版４　１．椿市廃寺出土軒丸瓦
　　２．椿市廃寺出土軒平瓦
巻頭図版５　１．椿市廃寺出土陶器
　　２．椿市廃寺出土磁器

図版１　１．願光寺（南から）
　　２．塔心礎（東から）
　　３．講堂跡北側調査前状況（北から）
図版２　１．椿市廃寺寺域周辺（東上空から）
　　２．調査区全景（南東上空から）
図版３　１．講堂基壇北西隅部（西から）
　　２．講堂基壇北西隅部（北から）
図版４　１．講堂基壇北側土層断面（西から）
　　２．講堂基壇西側土層断面（南から）
図版５　１．講堂跡北側瓦堆積状況（北から）
　　２．講堂跡北側木材出土状況（北から）
　　３．Ⅲ区１トレンチ東壁土層断面（西から）
図版６　１．回廊跡（北から）
　　２．回廊跡（東から）

図版７　１．１号掘立柱建物跡（東から）
２．１号掘立柱建物跡Ｐ３土層断面（南から）
３．１号掘立柱建物跡Ｐ５土層断面（南から）
図版８　１．Ⅳ・Ⅴ区調査区全景（北から）
２．４号掘立柱建物跡（北から）
３．Ⅳ区１トレンチ（北から）
図版９　１．Ⅶ区調査区全景（西から）
２．Ⅶ区調査区全景（南から）
図版10　１．５号掘立柱建物跡（北から）
２．５号掘立柱建物跡Ｐ８遺物出土状況（西から）
３．５号掘立柱建物跡Ｐ４遺物出土状況（西から）
図版11　１．１号井戸（南から）
２．１号井戸（東から）
３．２号井戸（東から）
図版12　１．３号井戸・１号土坑（南から）
２．３号井戸土層断面（南から）
３．３号井戸井戸枠（南から）
図版13　１．土坑群（南から）
２．７号土坑（南東から）
図版14　１．20号土坑（東から）
２．20号土坑鴟尾出土状況
３．20号土坑完掘状況（南から）
図版15　１．方形周溝（南から）
２．方形周溝（東から）
３．方形周溝遺物出土状況（北から）
図版16　軒丸瓦
図版17　軒平瓦
図版18　平瓦・丸瓦
図版19　鴟尾
図版20　その他の瓦類・金属製品・銅銭・土製品
図版21　土器（１）
図版22　土器（２）
図版23　木製品（１）
図版24　木製品（２）
図版25　方形周溝出土土器

第Ⅰ章　調査にいたる経過

椿市廃寺は行橋市大字福丸にある古代寺院跡である。この地に古い寺院があったことはかなり昔から知られていたようで『大宰管内志』には「[舊記] に京都郡黒田郷福丸村、内有古利號叡山願光寺僧行基經歷諸國之時草創當寺云今時所安置之薬師佛乃行基之刻也當寺往昔有七堂伽藍羅天正之兵火悉為灰燼其礎今猶在田間とあり」とある。「今猶田間に在る」礎石は椿市廃寺のものをさすのであろうが、天正の兵火に罹り灰燼と為った叡山願光寺は椿市廃寺とは別の寺院と考えられる。願光寺はその後再興されて現在も椿市廃寺の伽藍の中心部に高野山真言宗の寺院として法灯を保っている。塔心礎やその他の礎石から椿市廃寺を古代寺院跡として初めて認識したのは原口信行氏で昭和25、26年頃のことである。原口氏は、この頃百済系の軒丸瓦を採集し、昭和27年には新たに新羅系の軒平瓦も採集された。昭和31年には、小田富士雄氏らによる測量調査が行われ、この寺の伽藍配置が四天王寺式であることが想定された。

その後昭和52、53、54年と三次にわたり行橋市教育委員会が事業主体となって九州歴史資料館による発掘調査が実施された。この調査は遺跡の保存の資料を得ることを目的としたものでトレンチ調査により計1,280㎡が発掘された。調査により、講堂の基壇の規模・構造が確認されるとともに塔、金堂などの位置も想定された。また、多種類の瓦が出土しその同笵関係等も追究された。

こうした調査結果をふまえ、椿市廃寺の一部が昭和56年２月２日付で行橋市の史跡に指定された。

今回の発掘調査は、椿市地区の県営ほ場整備事業にともなう事前緊急調査である。当初、市教育委員会としては遺跡の重要性から、盛土による保存方法等の検討も含めた工事の設計変更を県行橋農林事務所と協議したがこの段階では合意が得られず、北側の排水路が講堂の基壇の一部を破壊する事態も予想された。このため工事による影響が予想される願光寺周辺2,600㎡と願光寺の北東部1,150㎡の計3,750㎡を対象として行橋市教育委員会が発掘調査を行った。

なお発掘調査関係者は下記のとおりである。

【調　査　指　導】

九州歴史資料館	栗原和彦	

【行橋市教育委員会】

教育長	白石　壽	
社会教育課長	木下弘徳	（前任）
	浜島一義	（前任）
	永岡正治	
社会教育係長	石浦博文	（前任）
文化係長	竹下和則	（前任）
	西江文敏	
庶務担当	小堤かおり	（前任）
	竹田浩輔	（前任）
	西村有二	
調査担当	小川秀樹	
	村上智恵子	

なお調査にあたって次の方々の御指導及び御協力を得た。ここに記して感謝の意を表します。

文化財関係者

石松 好雄	磯村 幸男	一川 淳江	井上 信隆
井上 裕弘	小田 富士雄	亀田 修一	辛嶋 眞治
川述 昭人	川本 義継	木下 修	倉住 靖彦
佐々木 隆彦	末永 弥義	高尾 栄一	高橋 章
坪井 清足	飛野 博文	長嶺 正秀	中村 修身
丹羽 博	橋口 達也	花谷 浩	柳田 康雄
山崎 信二	横田 賢次郎	横田 義章	米田 鉄也

地元関係者

井関 繁則	井上 信彦	岡崎 ユキエ	小野 初子
川上 富士視	進谷 求	貫山 光	森本 英生
安田 益次郎			

調査には以下の者が携わった。

発掘調査

井上 芳信	井上 伊都子	井上 信隆	井上 典子
井関 クニ子	井無田 栄子	植村 チエ子	奥野 祥子
小野 志夫	川上 愛子	川上 克己	国永 敏枝
坂本 喜美代	坂本 千恵子	重村 鈴美	末松 節子
杉野 政一	田中 フクミ	原口 アキエ	三井 恭子
森脇 勢津子	山本 和子	和田 登美江	

整理作業

内本 康代	川本 壽子	城戸 幹子	佐藤 裕子
西岡 賢子	二木 伊都美	平井 みどり	下原 由紀子

（順不同）

第Ⅱ章　位置と環境

椿市廃寺は豊前国京都郡福丸村、現在の福岡県行橋市大字福丸に位置する。遺跡名の椿市は市制施行以前、一町八村時代の村名である。

行橋市は九州の北東部に位置し、瀬戸内海西端の周防灘に面してひらけた京都（行橋）平野の中央を占めている。明治22年の郡制改革で京都郡に統合されるまでは、椿市廃寺の位置する平野の北側が京都郡、南側は仲津郡であった。この両郡は古代、豊前国において中心的役割を果たした地域である。この地の地域性として瀬戸内海を介して九州のなかでは大和勢力との関係が比較的強く認められるという点と、渡来人が多く存在するという点がある。大宝２（702）年の豊前国戸籍帳には豊前国仲津郡丁里、上毛郡加自久也里、同郡塔里に秦姓など渡来系氏姓が数多く見られる。このことからもかなりの数の渡来系の人々がこの地に居住していたものと思われ、椿市廃寺をはじめとする初期寺院の建立に大きな役割を果たしたことであろう。

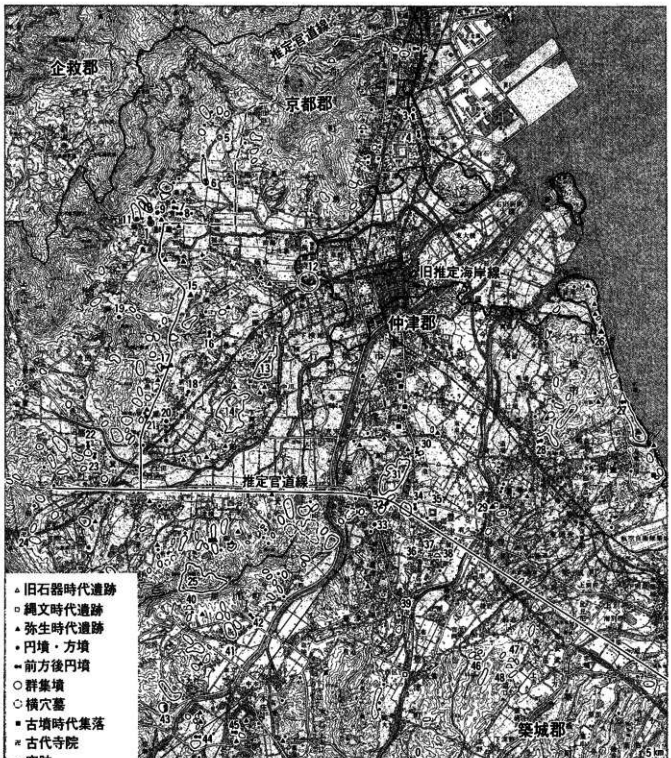
京都平野は周防灘に注ぐ幾筋もの中小河川によって形成された小さな平野の集合体といえる。椿市廃寺は京都平野の北側をカルスト台地平尾台から東流する小波瀬川によって形成された小平野の西奥部に立地している。椿市廃寺の東南の長尾は『日本書紀』の景行記に見える長峡県の遣称地であり、西側の高来は『和名抄』に載る京都郡高来郷にあたる。

椿市廃寺周辺の弥生時代の様相は必ずしも明らかではないが、廃寺の北に位置する苅田町木ノ坪遺跡[1]や南に位置する下崎ヒガンデ遺跡[2]の存在から周辺に弥生時代の集落が点在していたことが予想される。古墳時代は後期にいたるまで、目立った首長墓は見られないが、６世紀中頃から後半になると、小型の前方後円墳が３基築造されている。それ以降は、福丸１号墳[3]、徳永泉古墳[4]、願光寺裏山古墳[5]など巨石を使用した横穴式石室を内部主体とする円墳（もしくは方墳）が築造されている。またこの時期平尾台の山裾などに、夥しい数の群集墳が築かれている。

椿市廃寺の建立に先立つ古墳時代後期の京都郡の中心は、椿市廃寺の約４㎞程南の勝山町の黒田を中心とする地域である。ここには６世紀初頭から八雷古墳、扇八幡古墳、庄屋塚古墳といった大型前方後円墳が築造され、その後、６世紀末から７世紀の初めにかけて、九州屈指の石室規模を誇る橘塚古墳[6]、綾塚古墳（円墳）が築かれており、この地域が６世紀から７世紀初頭における豊前の最有力豪族の本貫地であったと考えられる。しかし、旧京都郡域で確認されている唯一の初期寺院である椿市廃寺は、これらの古墳群からやや隔たった位置に建立されており、このことをどう理解するかが問題となる。

一方、古墳時代末頃になると、仲津郡勢力の台頭が認められ、６世紀末から７世紀にかけて、豊津町に彦徳甲塚（円墳）、甲塚方墳など大型古墳が築かれている。２㎞ほど南の上坂廃寺はこの両墳の被葬者の後裔によって７世紀末前後に建立されたものと考えられる。仲津郡のもう一つの初期寺院、木山廃寺は上坂廃寺の西方４㎞の犀川町木山に位置する。この寺は８世紀初頭の建立とされ、椿市廃寺と同笵の百済系軒丸瓦（軒丸瓦Ⅰ類）が出土する。仲津郡ではその後、８世紀中頃には、豊津町国作に国府が置かれ、ほぼ同じ頃、同町国分に国分寺が建立され、ここにおいて豊前国の中心は京都郡より仲津郡に移行した感がある。

京都郡と仲津郡の郡境を東西に連なる低山脈の一角には、７世紀に中央政権の主導で築かれた山



1．椿市廃寺
7．黒添メウト塚古墳
13．前田山遺跡
19．バンリュー古墳
25．御所ケ谷神籠石
31．竹並横穴墓群
37．豊前国分尼寺
43．上大村古墳
2．石塚山古墳
8．徳水丸山古墳
14．下稗田遺跡
20．橘塚古墳
26．長井遺跡
32．甲塚方墳
38．歴荻瓦窯跡
44．大熊古墳
3．番塚古墳
9．徳水屋古墳
15．下崎ヒガンデ遺跡
21．綾塚古墳
27．石並古墳
33．彦徳甲塚古墳
39．上坂廃寺
45．本庄古墳
4．御所山古墳
10．願光寺裏山古墳
16．八雷古墳
22．雨八幡古墳
28．華人塚古墳
34．碧社古墳
40．福六瓦窯跡
46．宇土窯跡
5．谷遺跡
11．福丸１号墳
17．寺田川古墳
23．笊田丸山古墳
29．徳水川ノ上遺跡
35．豊前国府
41．木山廃寺
47．茶臼山東窯跡
6．神楽古墳
12．草野津推定地
18．庄屋塚古墳
24．菩提廃寺
30．ヒメコ塚古墳
36．豊前国分寺
42．姫神古墳
48．雲かへり窯跡

第１図　椿市廃寺周辺の主要遺跡分布図（１/80,000）

城の一つ御所ヶ谷神籠石がある。花崗岩の切石を用いた列石や石墨、精緻な版築土墨など、朝鮮半島系の土木技術が随所に認められる。

御所ヶ谷神籠石の北麓には、大宰府から宇佐へ向かう西海道官道が、京都郡の条里に平行し東西に走っている。沿道には、嘉穂郡筑穂町の大分廃寺、田川郡香春町の天台寺跡、築上郡新吉富村の垂水廃寺といった新羅系軒瓦を出土する寺院が分布している。この官道から分岐して北上し、刈田驛へ至る官道にはいくつかの説があるが、勝山町大久保あたりから北上して京都峠を経て刈田驛へ向かうルートでは、椎市廃寺のすぐ東側を通ることになる。この推定官道沿いの御清水池で緑釉陶片の良品が表採されており[7]、また椎市廃寺のやや北に位置する苅田町谷遺跡では、唐三彩陶枕が出土している[8]。このようなことから官道か否かは別にせよ、椎市廃寺の東側を通るこの道は京都郡を南北に縦断する古代の重要な交通ルートであったことは間違いない。椎市廃寺から約4kmほど小波瀬川を下った付近は、古代瀬戸内航路の要港、草野津の比定地である。また、歴史地理学の面から椎市廃寺の東方500mの須磨園に、一時期豊前国府が置かれたとする説[9]もある。

以上のような歴史的、地理的背景のもとで7世紀末ないし8世紀初め頃、椎市廃寺は建立されたものと考えられる。

註 (1) 苅田町教育委員会 『黒添・法正寺地区遺跡群』 1987
(2) 1994年に行橋市教育委員会が発掘調査
(3) 1993年に行橋市教育委員会が発掘調査
(4) 1995年に行橋市教育委員会が発掘調査
(5) 前田達男 「北部豊前の終末期古墳の一例」 『石垣』第2号 1987
(6) 平成5、6年度に勝山町教育委員会が確認調査し、方墳となる可能性がある
(7) 井上信降氏採集。 現在行橋市教育委員会が所蔵
(8) 苅田町教育委員会『谷遺跡調査報告書』 1990
(9) 戸祭由美夫 「豊前国府考」 『歴史地理研究と都市研究』上 1978

参考文献

行橋市教育委員会 『椎市廃寺』 1980
行橋市教育委員会 『八雷古墳』 1984
豊津町誌編纂委員会 『豊津町誌』 1985
犀川町教育委員会 『木山廃寺』 1975
豊津町教育委員会 『豊前国府』 1985、86、87、89、90、91、92、93
小川秀樹「豊前御所ケ谷神籠石」『古代文化』47巻12号 1995
木下 良 「西海道の古代官道について」『大宰府古文化論叢』下巻 1983
田川市教育委員会『天台寺跡』 1990
新吉富村教育委員会『垂水廃寺』 1976

第Ⅲ章　調査の概要

本調査は、県営ほ場整備事業にともなう事前調査という性格から、発掘調査はほ場整備工事が遺構に影響を及ぼすと考えられる範囲に限定して行った。

すなわち、願光寺を中心として東・西・北側の約2,600㎡、寺院の北東側の丘陵裾部約1,150㎡が調査の対象である。

今回の調査では講堂の北西隅の基壇が確認され、講堂の東側からは回廊と考えられる遺構が検出された。また寺院に先行する掘立柱建物群の存在もより明確になった。出土する瓦は、前回出土したものと同種であるが、新たに塑像螺髪、白釉緑彩陶片などの新資料が加わった。寺院北側からは木製品が多数出土し、寺院の建築部材と思われるものも含まれている。また寺院の北東部からも寺院と併存する時期の井戸などが検出された。

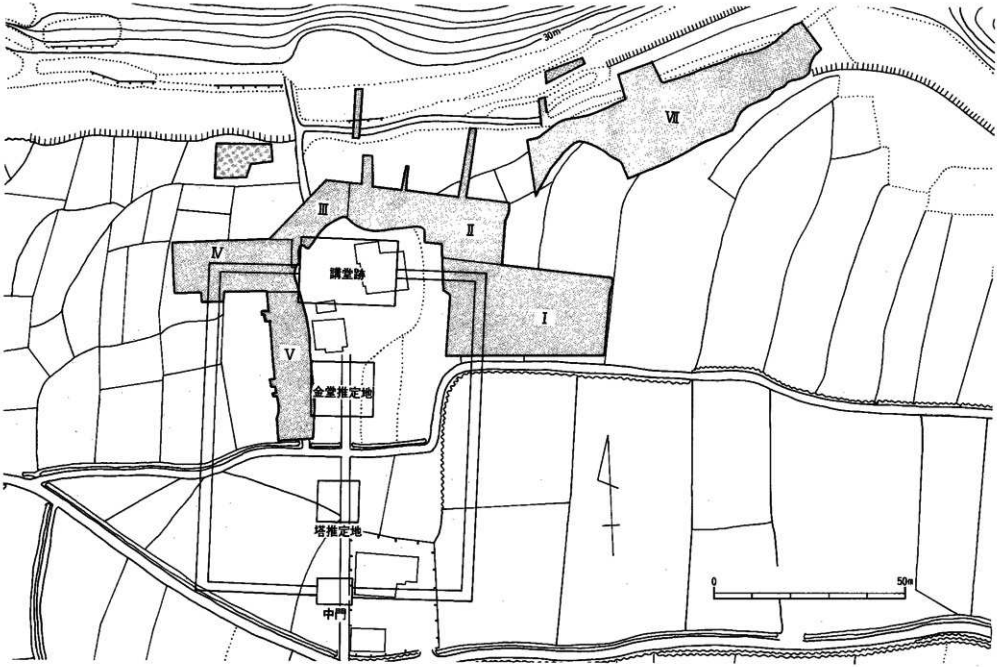
主要伽藍の推定地であってもほ場整備盛土部分については調査の対象外としたため調査範囲は極めて限定されたものとなった。このため塔の正確な位置比定や基壇の規模や構造の解明は今後の課題として残されている。また金堂についても今回の調査範囲ではその遺構が検出されなかった。

報告書ではこれらの地区をⅠ区（講堂跡東側）、Ⅱ・Ⅲ区（講堂跡北側）、Ⅳ区（講堂跡西側）、Ⅴ区（金堂推定地西側）、Ⅵ区（講堂跡の北東丘陵裾部）として表示する。

現地での調査は、平成４年６月16日から平成４年12月11日まで実施した。

その後、調査で検出された遺構、遺物の重要性から、願光寺周辺をほ場整備の工事範囲からはずして史跡公園として整備することが市によって計画された。しかし用地交渉が難航しこの計画は実現していない。なお遺構そのものは地権者の協力を得て盛土により保存されることとなった。

整理作業に取り組んだのは平成６年度からで、行橋市教育委員会において実施し、平成７年度の国庫補助事業として報告書を刊行する運びとなった。



第２図　調査区位置図（１/1,000）

第Ⅳ章　寺院関係の調査

1．寺域の調査（Ⅰ～Ⅴ区）

寺域の調査は講堂跡の東側（Ⅰ区）、講堂跡の北側（Ⅱ区，Ⅲ区）、講堂跡の西側（Ⅳ区）、金堂推定地の西側（Ⅴ区）の2600㎡が対象となった。講堂や金堂推定地の大部分は願光寺の境内地であり、また塔推定地は盛土工事となるため今回の調査範囲から除外した。このため寺院の中心伽藍についての調査はごく部分的なものになり、むしろその周辺部が調査の主体となった。

この調査により講堂基壇の北西コーナー、回廊状に並ぶ柱穴列、寺院に先行する掘立柱建物跡などが確認された。ただし、調査の過程で寺院部分の盛土保存の合意がなされたため、遺構の多くは平面プランの上面検出にとどめた。

（1）講堂基壇（第3図、図版3・4図）

講堂は昭和52年の九州歴史資料館によるトレンチ調査で礎石や基壇が確認され、椿市廃寺の中心伽藍の中で唯一、具体的な位置、規模が把握されていた遺構である。

前回の調査が願光寺の境内を対象として行われたのに対して、今回の調査では願光寺境内地脇の農道部分を調査し、前回調査できなかった基壇の北西コーナーの確認を試みた。

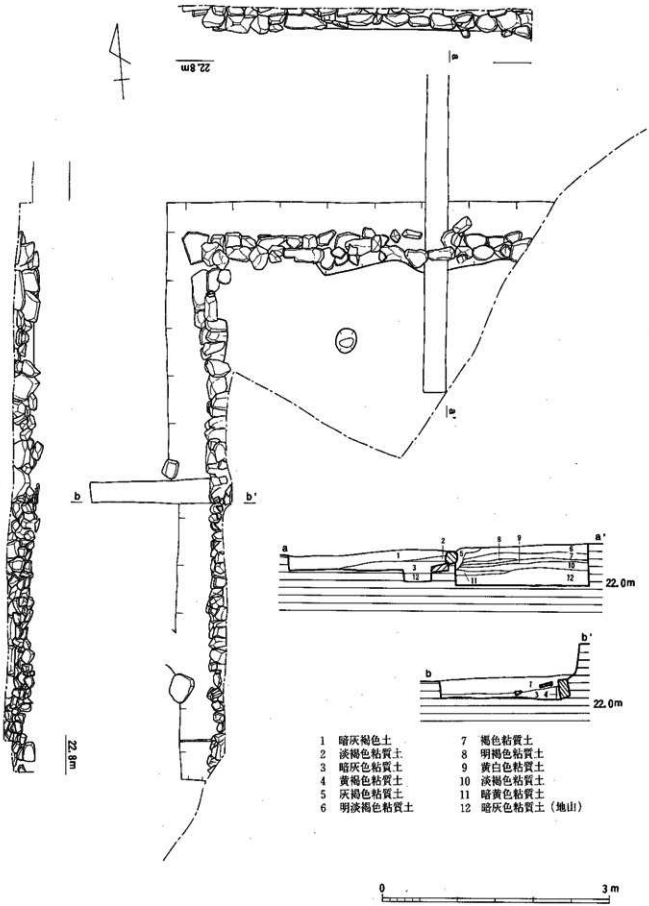
その結果、想定されていた位置に、南北7.0m東西4.6mにわたり講堂基壇の石組を検出し、報告されていた講堂の位置、規模を追認することとなった。しかし、この部分に置かれたはずの北西コーナーの礎石は抜き取り跡も含めて確認できなかった。この部分の遺構確認面は、前回調査された他の6個の礎石の上面のレベルと比較すると40cmほど低いことから、礎石部分は削平されたものと理解される。

基壇の石材は花崗岩や片岩を主体とし、玉石積みである。基本的には人頭大の石を二列に敷きならべそのほぼ中央に玉石を積み上げており、前回のトレンチ調査で観察されたとおりであるが、南北の基壇石列の南側は、他の部分と比較して著しく小さい石材で構成されている。これよりこの部分については積み直しが行われている可能性が高い。基壇は残りの良い部分で45cmほどの高さを測る。ただし、礎石が削平されていることを考慮すると当初の基壇はこれよりもやや高かったことが考えられる。

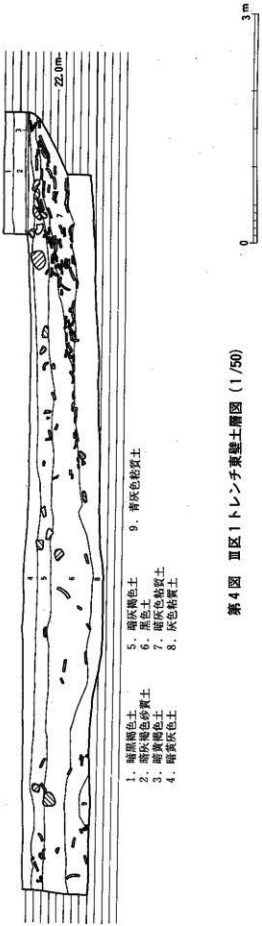
基壇の北側に設けたトレンチでは、基壇石組の内側に一層の厚さ5cmから15cmほどの版築層が6層認められた。掘り込み地業は認められなかった。

（2）講堂跡北側（第4・6図、図版5）

講堂跡北側では、昭和52年度のトレンチ調査で溝状の落込みと、そこに堆積する膨大な瓦が確認されていた。今回はこの部分をある程度面的に把握することができたが、遺構に影響を受けない下層部分についてはトレンチにより堆積状況を確認するにとどめた。今回の調査でも前回同様多量の



第３図　講堂基壇北西隅部実測図・土層図（１/50）



第4図　Ⅱ区1トレンチ東壁土層図（1/50）

瓦や木材の出土をみた。

椿市廃寺の周辺は試掘調査の結果でも、氾濫原を示す砂礫層や粘質土層が随所にみられ、古くよりたびたび出水するような地勢であったことがうかがえる。このため、寺院などの大型建造物を建てるに必ずしも適した地とはいいがたい。こうした地形条件のもとで講堂などの主要伽藍は、比較的高所で安定した基盤を選地し建立したものと考えられる。

寺院が建っていた当時、講堂の北側には西から東への流水、あるいは滞水状況があったと考えられる。第8層の灰色粘質土がその当時の土層と想定される。この層から瓦や土器が若干出土している。この上層の第7層が寺院崩壊時の状況を示す土層と思われ、瓦の集中した堆積がみられた。塑像螺髪もこの層から出土している。

第6層にはその後再び湿地になった状況が認められた。この層の中ほどには、瓦や多量の木材が広範囲に堆積していた（第6図）。これらの中には加工痕を有し、寺院の建築部材と考えられるものも含まれていた。しかし、これがそのまま、講堂倒壊時の状況を示すものではなく、自然木などが混在することから、おそらく倒壊後の二次的堆積と考えられる。

この講堂の北側部分ではかなり上層からも瓦が出土し、寺院の崩壊後今日に至るまで幾度かにわたって整地を受けたことが見て取れる。

講堂北側のⅡ区、Ⅲ区から出土した軒瓦のうち軒丸瓦では百済系単弁八弁軒丸瓦（軒丸瓦Ⅰ類）が10点中7点、軒平瓦では重弧文軒平瓦（軒平瓦Ⅰ類）が26点中24点ともっとも多い。このことから、少なくとも講堂には創建時にこの二種の瓦が用いられたのであろう。また、少量ではあるが出土している平城宮同笵軒丸瓦（軒丸瓦Ⅲ類）及びこの笵の蓮弁と鋸歯文に手を加えた複弁八弁蓮華文軒丸瓦

第5図　Ⅰ～Ⅴ区遺構配置図（1/300）

第６図　講堂跡北側木材集中地点実測図（１/40）

（軒丸瓦Ⅳ類）は創建後の補修に際して用いられたものと考えられる。

（3）回廊跡（第8図、図版6）

講堂跡の東側（Ⅰ区）で南北に二列に並ぶ掘立柱の掘形を検出した。この掘形列は中ほどにおよそ2間分（15尺）の空白部をはさみ、北側に2間分（16尺）南側に6間分（39尺）が検出された。柱間は、空白部の南側は梁行10.5尺、桁行6.5尺とほぼ一定しているが、北側は梁行が9.5尺から10.5尺前後、桁行が7.5尺から8.5尺前後と若干不揃いである。南側の柱掘形は一辺60cm前後で平面方形である。北側では円形のものも混じり、大きさもやや不揃いである。

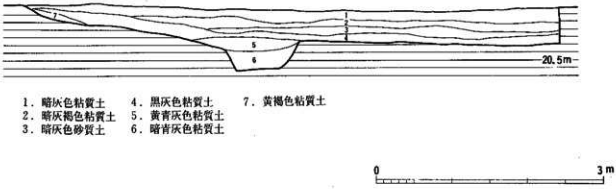
講堂への接続は、梁行7.5尺ほどで、講堂妻部の中央の柱に回廊の中心が取り付くことを想定している。しかし、これらの掘形は盛土保存されることから完掘しておらず、とくに北面回廊推定部分では1号掘立柱建物跡と重複し不明確な部分が多い。また講堂への取付部分自体が未発掘であることから、この点の検証は将来の調査を待たねばならない。

今回の調査では講堂の西側において、東面回廊に対応する遺構は確認されておらず、現時点でこれらの掘立柱掘形群を回廊跡と決定づける要素は必ずしも多くはない。しかし東面回廊部分の柱掘形は講堂の主軸とほぼ平行に並び、位置的にも回廊ととらえて大きく矛盾しないことから、今回の報告では回廊跡という位置付けをした。

（4）講堂跡北東部（第7図）

Ⅱ区の東側にあたる。講堂北側と同じく地形的にやや低く、たびたび滞水していた状況を示している。ここの堆積土中からも土器や瓦や木製品が出土するが、講堂北側のように集中したものではない。上層にまとまって見られる瓦は講堂倒壊後に二次的に投棄されたものであろう。

Ⅱ区の1トレンチ（第7図）から寺院の柱の転用材の可能性がある上部径44cm、高さ46.4cmの丸太材を刳りぬいた円筒形の井筒（第47図－21、図版24）が埋設された状態で出土した。この井戸遺構は、検出後、土層断面が崩落したため井筒の埋設状況は図化できなかったが、掘形の深さは確認



1．暗灰色粘質土　4．黒灰色粘質土　7．黄褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土　5．黄青灰色粘質土
3．暗灰色砂質土　6．暗青灰色粘質土

第7図　Ⅱ区1トレンチ西壁土層図（1/50）

第 8 図　回廊跡実測図（1 /100）

面から0.8mを測った。

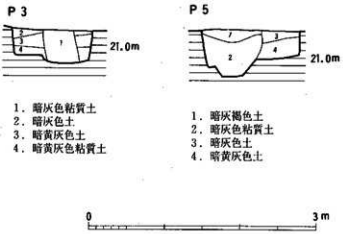
Ⅱ区1、2トレンチの暗灰褐色粘質土からは、鍑或いは火舎の一部と考えられる白釉緑彩片(第45図－1～3、巻頭図版5)が出土している。

(5) 掘立柱建物跡

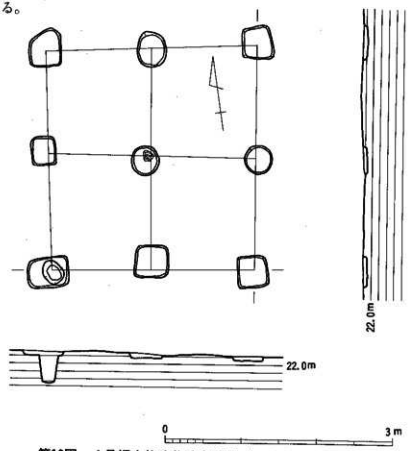
1号掘立柱建物跡(第8・9図、図版7)

講堂跡の東側に位置する2×5間以上の東西棟建物である。昭和53年に九州歴史資料館が調査したJトレンチで、これらのうち西側で4個分の柱掘形が検出されていた。

建物の南北軸の方位は、N-9°-Eで寺院の推定主軸より4°ほど東に振れるが、回廊の南北主軸とはほぼ一致する。また建物の南半分は北面回廊の推定線と重複する。梁行は2間(4.8m)で柱間2.4m(8尺)桁行は西側が未発掘であるため不明だが、5間分(8.5m)までを確認しており、柱間は1.8m(6尺)である。



第9図　1号掘立柱建物跡柱掘形断面図(1/50)



第10図　4号掘立柱建物跡実測図(1/50)

柱掘形は、一辺0.7～1.3mの隅丸長方形を呈し、これらのうち２個を断割り調査した（第９図)。Ｐ３では径40cmの柱跡が認められ、深さは45cmを測った。

講堂などと方位が揃うことから寺院と一時期併存した建物と見ることもできるが、回廊と位置づけた遺構の柱掘形に切られていることから、寺院に先行する建物と考えたい。ただし、建物と伽藍の方向性が一致することから寺院と極めて密接な関係を持った建物であることが推定される。

２号掘立柱建物跡（第８図）

講堂の東側で１号掘立柱建物跡の南側に位置する。柱掘形は、長辺が0.7～1.2mの隅丸長方形を呈し、柱間は南北方向が2.4m(８尺）東西方向が2.1m(７尺）である。

この建物は、南北方向に３間分ずつ２列に並ぶ柱掘形が九州歴史資料館が調査したＪトレンチですでに検出されおり、前回の報告書ではＳＢ002として、東へのびる南北３間の総柱建物と想定していた。しかし今回の調査で、この建物の東側を調査したところ、これに続く柱穴は検出されず、この建物は西に向ってのびることが確認された。したがって先の調査では南北３間で西に伸びる総柱建物の東側２間分が検出されていたことになる。

この建物の南北軸はN-12°-Eで講堂や回廊、１号掘立柱建物跡等に対してやや東に振れている。

４号掘立柱建物跡（第10図、図版８－２）

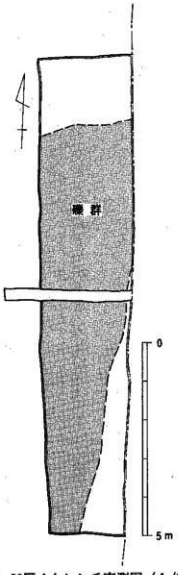
講堂西側のⅣ区の５トレンチで検出した。２×２間の総柱建物である。柱掘形は円形のものと方形のものがある。主軸方向はN-６°-Eである。柱間寸法は、東西方向が2.7m(９尺）南北方向が3.0m（10尺)を測る。

（５）金堂推定地の調査（第11図、図版８－３）

昭和53年の調査で願光寺境内地に設けられたトレンチで、講堂基壇の南辺から50尺の位置に金堂基壇の北端と推定される遺構が検出された。前回報告書では、これを手掛かりに金堂の位置と規模を推定している。

今回の調査では、金堂推定地の西辺部分を確認するためにⅤ区４トレンチを設定した。その結果、トレンチの大部分は氾濫原を思わせる礫群に覆われており金堂の基壇等は検出されなかった。このため金堂の位置や規模を決定することは今回の調査でも果たせなかった。

このように基壇の明確な遺構は検出されなかったが、トレンチの南東部に氾濫原状の礫群が及んでいない部分が認められた。この礫群の及んでない部分を氾濫後に、金堂基壇が削平された痕跡と考えることもできる。ここを基壇の西辺と仮定し、伽藍の中軸線で折り返すと基壇の東西規模は55尺となる。



第11図　Ⅴ区４トレンチ実測図（1/100)

前の調査で推定された基壇北辺ラインを基準にすると、昭和55年の報告書で想定されたものより、やや小規模な東西55尺、南北50尺ほどの基壇をこの位置に想定することができようか。

このように金堂の位置、規模を想定すると金堂推定地と塔推定地の間隔は60尺となり、いままでの想定より10尺ほど広がった。

2．寺院北東部の調査（Ⅶ区）

推定寺域（Ⅰ～Ⅴ区）の北東部が工事により削平を受けるため、調査区を設定してⅦ区とした。調査地の現況は水田で低丘陵地の裾部に位置している。北から南に緩く傾斜し、標高約21ｍから23ｍの範囲にある。遺構は調査区の中央部に集中し、他の部分では希薄で東側では検出されなかった。また、南側の低い部分は講堂北側で検出した溝状の落込みの続きで、やはり遺構はなかった。

調査の結果検出した遺構としては、掘立柱建物跡３棟・井戸３基・土坑・溝状遺構等がある。また、調査区の中心部で弥生時代後期終末～古墳時代初頭頃と考えられる方形周溝を検出した。第Ⅴ章にゆずることとする。

（１）掘立柱建物跡

５号掘立柱建物跡（第12図、図版10）

調査区の西側隅で検出した。２×２間の総柱建物。桁行3.2ｍ、梁行2.7ｍの規模で主軸方向はＮ－７°－Ｅである。柱穴の掘形は、50㎝前後の不整円形で深さは北辺の残りのよいもので約50㎝を測る。ただし、調査区縁辺に位置するため遺構が西側にのびている可能性も考えられる。

一部の柱穴では平瓦、丸瓦の破片と河原石が柱の礎盤や根固めに使用された状態で残っていた。とくにＰ６、８からは新羅系軒平瓦（軒平瓦Ⅱ類）が出土した（第26図－１、図版17）。平瓦は叩き目が確認できるものはすべて縄目であった。他に須恵器と土師器の小片が出土している。

６号掘立柱建物跡（第13図－６）

調査区の中央部で検出した。東西棟２×４間の掘立柱建物跡。桁行6.0ｍ、梁行3.5ｍの規模で主軸方向はＮ－83°－Ｗである。

柱穴の掘形は60㎝前後の円形で深さは20～50㎝。西辺の柱穴は方形周溝を切り、南東隅の柱穴は１号土坑によって切られて残っていなかった。

柱穴から瓦・須恵器・土師器が出土したが小片である。

７号掘立柱建物跡（第13図－７）

調査区の中央部の南側で検出した。２×２間の建物で桁行3.5ｍ、梁行3.0ｍの規模で主軸方向はＮ－78°－Ｗである。

柱穴の掘形は50㎝前後の円形で、深さは10～40㎝。一部の柱穴内に礎盤に使用したと考えられる偏平な石が残っていた。

須恵器・土師器・瓦の破片が柱穴内から出土したが小片である。

（2）井戸

1号井戸（第15図－1、図版11－1・2）

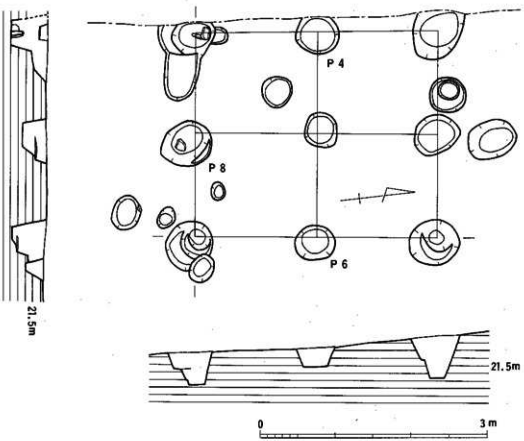
調査区中央部の北側で検出した。掘形は上面で長径3.0m、短径2.7mの楕円形である。井戸は掘形の中心より北東寄りの位置につくられている。

井戸枠の上部は10～50cmの大きさの礫と平瓦でつくられ一辺90cmの方形を呈する。しかし、その大半は井戸内部に崩落していた。下部は径15cm前後の丸木を横位置に積み、裏側に補強のための板材を縦に立ててつくられている。丸木はいずれも長さ1mほどに切断されているが樹皮が残り加工はされていない。丸木4本まで確認したが、それ以上は調査が危険となったため底面まで検出できなかった。井戸の深さは1m以上あると考えられる。

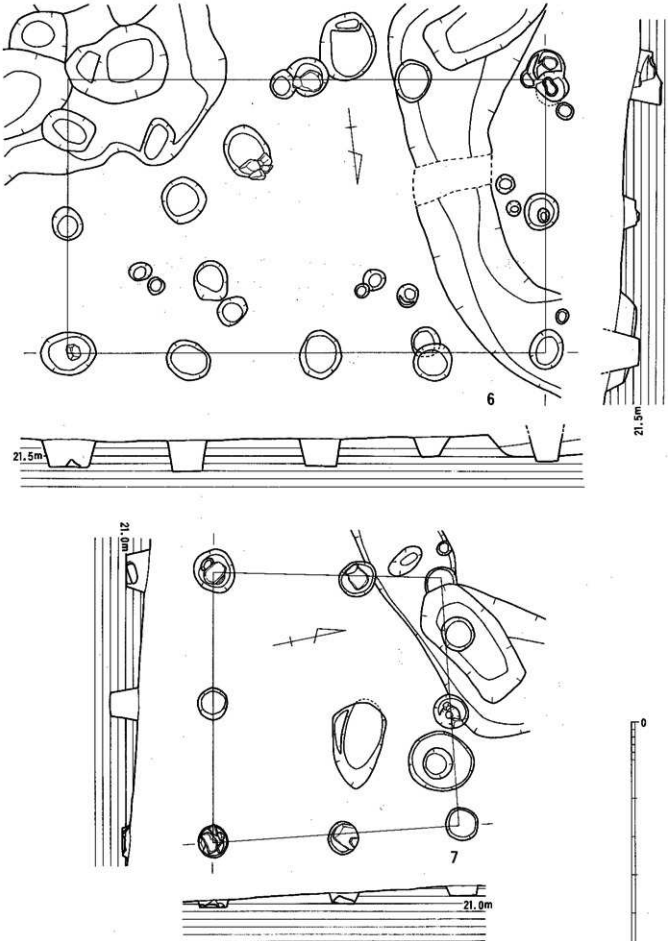
井戸内から土師器・黒色土器が出土した（第37図－1～3、図版21）。

2号井戸（第15図－2、図版11－3）

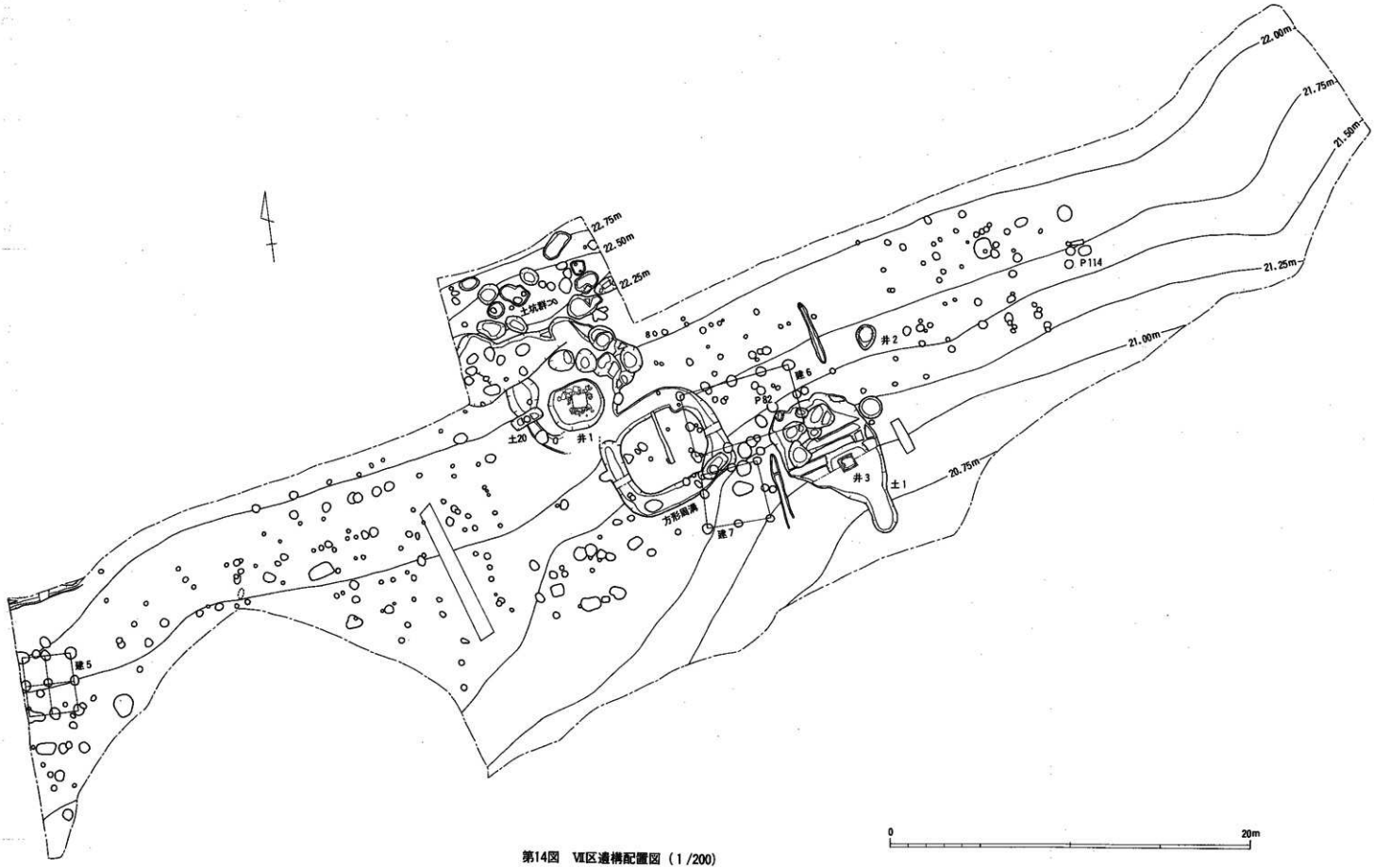
調査区中央よりやや東側で検出した素掘りの井戸である。上面は長径1.4m、短径1.0mの楕円形を呈する。下位になるほど狭くなり底面は径約80cmの不整円形となる。深さ1.3mを測る。遺物は出土しなかった。



第12図　5号掘立柱建物跡実測図（1/50）



第13図　6・7号掘立柱建物跡実測図（1/50）



第14図　Ⅶ区遺構配置図（1/200）

3号井戸（第16図、図版12）

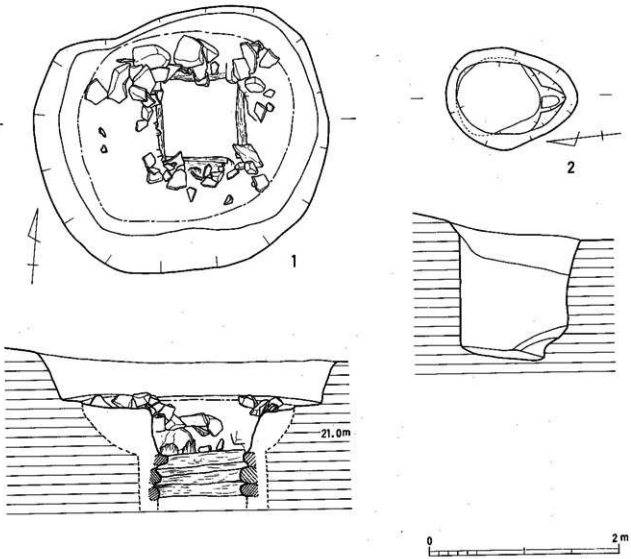
調査区中央部の南東側で検出した。検出時は1号土坑として調査をすすめていたが、深さ約40cmまで掘り下げた時点で井戸枠を確認し、3号井戸とした。本報告書では井戸枠検出までの1～6層を1号土坑、それ以下を3号井戸として取り扱うこととする。

1号土坑のほぼ中心部に長径2.5mの隅丸長方形の掘形があり、井戸はその西寄りの位置につくられている。

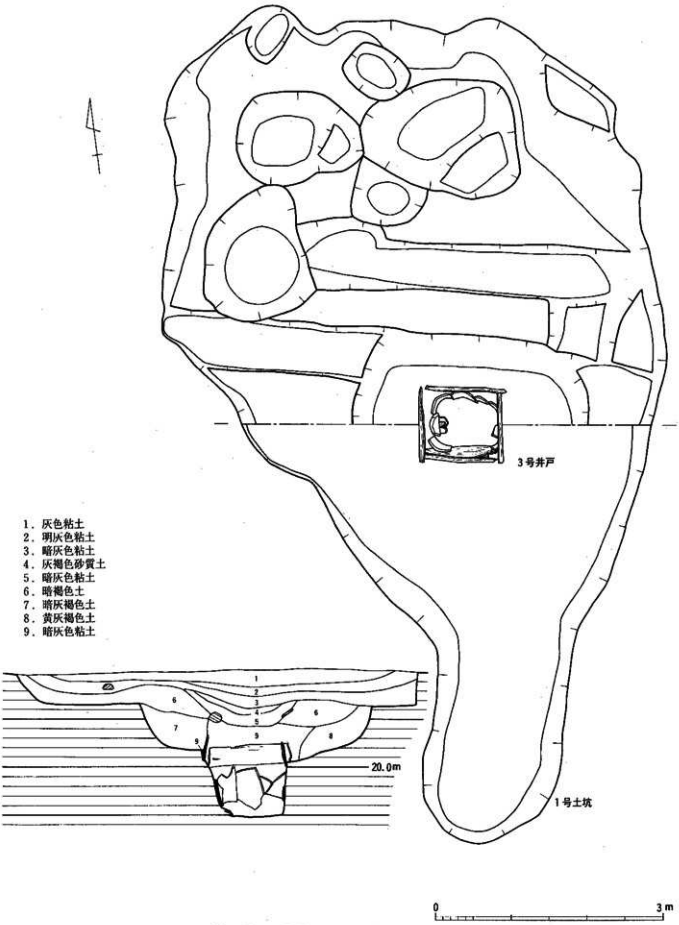
下部は平瓦を立て並べて井筒としたもので、平面は径60cmの楕円形を呈している。深さ50cmを測る。使用されている平瓦はいずれも完形に近く凸面叩き目は縄目と格子目である(第28図－1、第29図－3、図版18)。

上部は厚さ2cm前後、幅20cmの板材を方形に組んで井桁とし、1辺は80cmを測る。高さは板材2段分の40cmであったが調査時に崩壊し板材1段分のみ図示している。

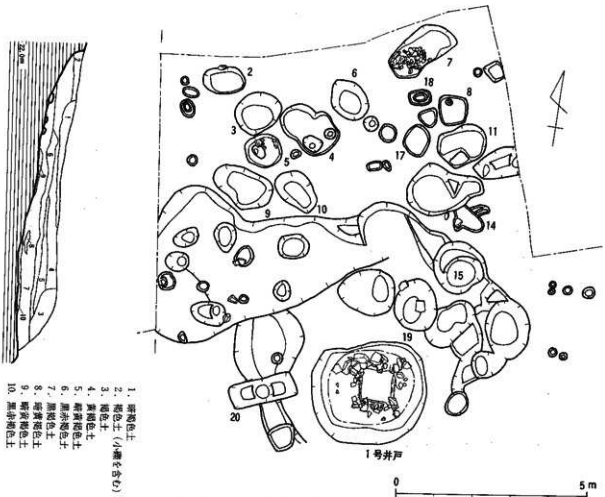
井戸内部からは土師器(第38図、図版21)・須恵器(第39図、図版22)・瓦類・鞴羽口(第51図、図版20)とともに高熱を受けて赤変した人頭大の礫が廃棄されたような状態で出土した。



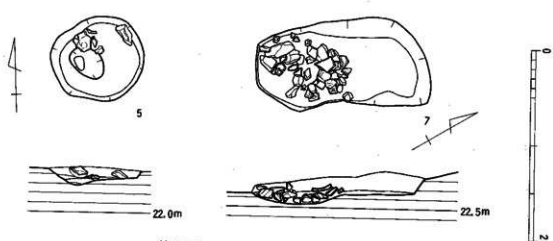
第15図　1・2号井戸実測図（1/40）



第16図　3号井戸・1号土坑実測図（1/50）



第17図　土坑群（2～19号土坑）実測図（1/100）

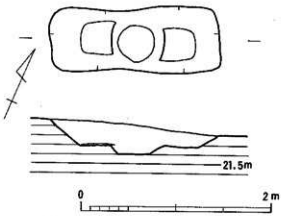


第18図　5・7号土坑実測図（1/40）

（3）土坑

1号土坑（第16図、図版12）

調査区中央部で検出した大型の土坑である。長径8.5m、短径5.3mを測り、南側が極端に狭くなる不整形なプランをもつ。3号井戸廃棄後に形成されたものであろう。底部は起伏がはげしく土坑状や溝状を呈しており、何らかの施設とも考えられるが、その性格は判然としない。しかし、遺物の多さや出土状況から最終的にゴミ捨場として使用されていたようだ。全体に粘質土が堆積していた。南半分は掘りすぎであるが、北半分と同様な状況であったと考えられる。



第19図　20号土坑実測図（1/40）

多量の土師器・須恵器・瓦類と数点の金属製品が出土した。

土坑群（2～19号土坑）（第17・18図、図版13）

調査区中央部北端、1号井戸の北側で炭が多く混じる堆積土が検出されたため、窯跡の存在を想定して調査を行った。その結果、窯跡の確認はできなかったが、形状、規模の一定しない土坑の集合が検出された。そのうち形状を把握できるもの18基について番号を付して第1表にまとめた。図示した5・7号土坑からはまとまった遺物が出土している。5号土坑は平面が円形を呈し、径約1m、深さ20cmを測る。縄目の叩き目を有す平瓦、土師器、須恵器の短頸壺が出土。この短頸壺を蔵骨器とする火葬墓の可能性もある。7号土坑は平面が歪んだ隅丸長方形を呈し、長径1.8m、短径0.9m、深さ35cmを測る。土師器、須恵器のほかに縄目の叩き目を有す平瓦、重弧文軒平瓦（軒平瓦Ⅰa類）が出土。また、拳大から径3cmほどの礫が集められたような状態で検出された。性格は不明瞭であるが、土坑墓の可能性がある。

第1表土坑群計測表

NO	長径	短径	深さ	平面形	出土遺物
2	1.1	0.7	0.24	長楕円形	土師器・須恵器・平瓦
3	1.3	1.0	0.19	円形	
4	1.6	1.1	0.24	不整形	土師器・須恵器・平瓦・丸瓦
5	1.0	0.9	0.20	円形	土師器・須恵器・平瓦
6	1.2	0.9	0.40	楕円形	土師器・須恵器
7	1.8	0.9	0.35	歪んだ隅丸長方形	土師器・須恵器・平瓦・軒平瓦Ⅰ
8	0.8	0.7	0.19	隅丸長方形	土師器・須恵器
9	1.6	1.0	0.21	楕円形	土師器・須恵器・平瓦
10	1.3	0.9	0.17	楕円形	土師器・須恵器・平瓦・丸瓦
11	1.4	1.0	0.31	不整形	土師器・須恵器・軒丸瓦Ⅰ
12	2.1	1.4	0.30	不整形	土師器・須恵器・平瓦
14	0.8	0.7	0.07	不整形	土師器・須恵器
15	1.2	1.2	0.42	円形	須恵器・平瓦
17	0.8	0.7	0.06	隅丸方形	
18	0.6	0.4	0.13	長方形	
19	1.4	1.2	0.21	円形	平瓦

20号土坑（第19図、図版14）

調査区中央部北側、1号井戸のすぐ西側で検出した。平面形は隅丸長方形で、長さ1.8m、幅65cm、深さ24cm弱である。主軸はN－66°－E。内部から人頭大の礫とともに鳥尾片が出土した（第32図－7、図版19）。土坑墓の可能性が考えられる。

3．遺物

今回の調査で多量の遺物が出土した。その大部分は瓦類である。以下出土遺物について、瓦類・土器類・陶磁器類・木製品・金属製品・銭貨・土製品に分けて報告する。

（1）瓦類

調査区内から膨大な量の瓦類が出土した。主に講堂跡北側から西側にかけて広がる瓦堆積層とⅦ区1号土坑から出土した。土のう袋で550袋分を数えた。軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾など出土しているが、大半は丸瓦、平瓦であった。

軒丸瓦（第20・21図、図版16）

第三次調査までをまとめた前回報告書『椿市廃寺』ではⅠ～Ⅴ類の軒丸瓦が報告されているが、今回の調査ではⅡ類高句麗系単弁六弁蓮華文軒丸瓦を除く4型式56点が出土した。

Ⅰ類　単弁八弁蓮華文軒丸瓦

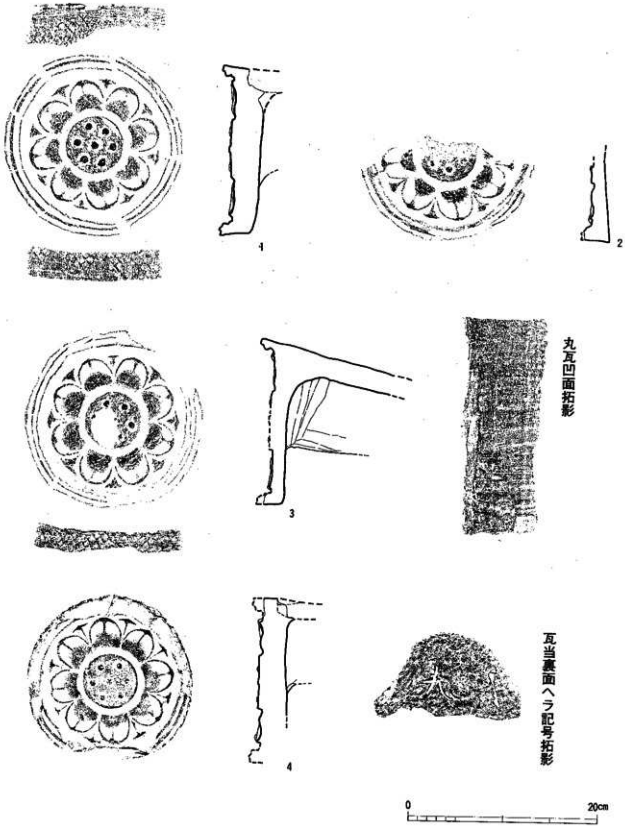
48点が出土し、全軒丸瓦のうち85％を占める。講堂跡北側から西側にかけての瓦堆積層（Ⅱ～Ⅳ区）から最も多く出土し20点を数える。また、Ⅶ区1号土坑からは集中して7点が出土している。笵傷の有無からａ，ｂに細分した。

Ⅰａ類（1・3・4）は46点を数える。中房は大きく1＋6の蓮子を配し、蓮弁は先端がやや尖り気味で強く反転する。間弁は楔形を呈し、外縁は直立縁で一重の圏線をめぐらしている。丸瓦の取り付け位置は高く外縁付近である。丸瓦凸面は丁寧にナデ消されているがわずかに確認できるものはすべて格子目の叩きであった。瓦当側面にも同様の叩き目が施され、ナデ調整が行われている。凹面には竹状模骨による痕跡が認められた。瓦当面の径は17.0～17.9㎝、厚さ2.0～3.4㎝である。4は瓦当裏面にヘラ記号を有するものである。Ⅰ区柱穴内から出土したものでナデ調整の後にヘラ状工具で深めに刻まれており「九」と読める。

Ⅰｂ類（2）は笵傷を有するもので2点あった。いずれもⅦ区1号土坑より出土。破片であるため全体を知り得ないが、蓮弁と外縁との間に笵傷が1箇所認められる。間弁がⅠａ類より高く楔形に近くなっている。Ⅰａ類の笵を彫り直している可能性が考えられる。瓦当面の厚さが2.0㎝以下でⅠａ類と比べて薄い。京都郡犀川町木山廃寺出土の単弁八弁軒丸瓦にも同じ箇所に笵傷があり、同笵と考えて間違いないだろう。

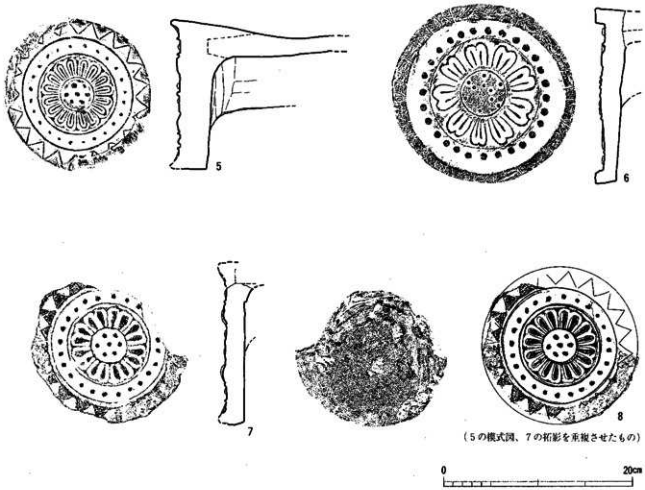
Ⅲ類　複弁八弁蓮華文軒丸瓦（5）

3点出土している。中房は小さく1＋6の蓮子を配する。弁区は界線に区切られ、八つの複弁を有す。外区内縁には25の珠文、外縁には線鋸歯文をめぐらす。丸瓦の取り付け位置はほぼ外区内縁付近で、差し込みのための溝をつくっている。瓦当裏面と側面、丸瓦凸面は丁寧なケズリが施されている。瓦当面の径は15.8～16.7㎝、厚さは3.5㎝前後である。3点のうち2点は、蓮弁の外側に笵傷を有している。なお、平城宮6284Ｆと同笵であることは従来から指摘されていたが、再度山崎



第20図　出土軒丸瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）

信二氏が平城宮6284Fの現物を市教育委員会に持参され、確認調査を行った。その結果は従来の見解を追認するものであったが、平城宮6284Fとは胎土、焼成が異なり平城宮で6284Fと組む軒平瓦



（5の模式図、7の拓影を重複させたもの）

第21図　出土軒丸瓦Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類拓影・実測図（1/4）

が出土していない点から笵型のみの移動であったと報告されている(註)。

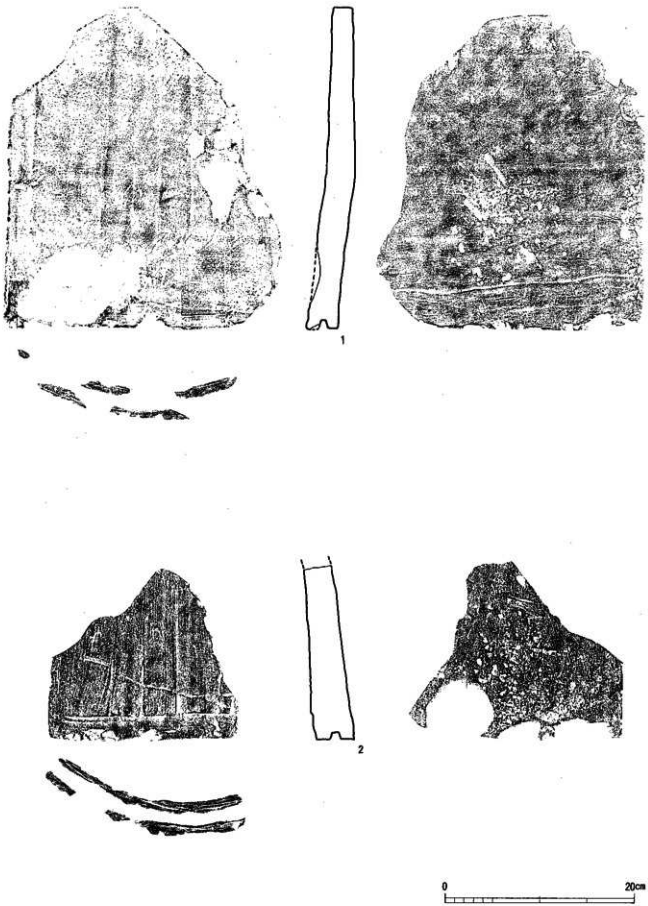
(註) 山崎信二「平城宮・京と同笵の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」1994

Ⅳ類　複弁八弁蓮華文軒丸瓦（7）

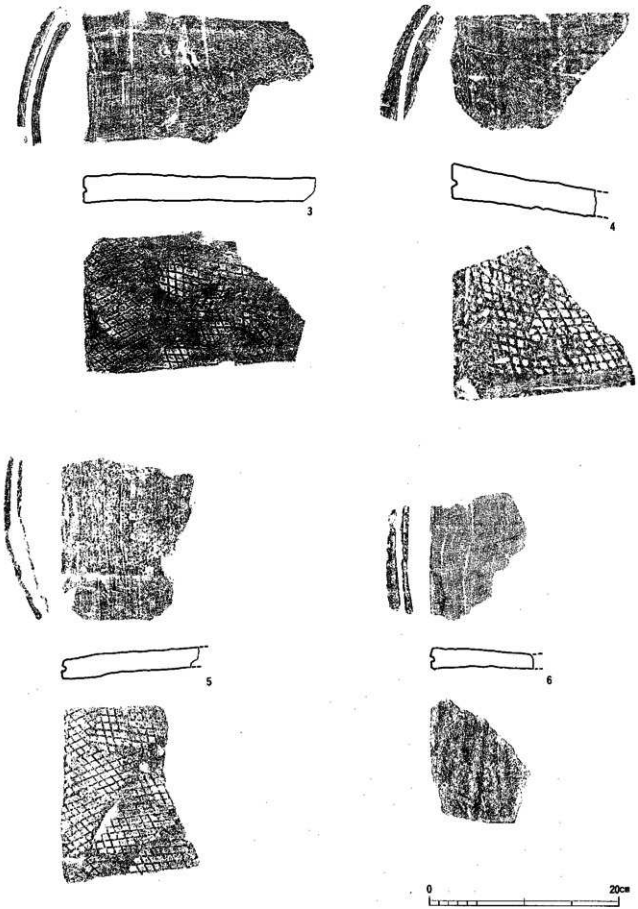
3点出土している。中房は小さく1＋6の蓮子を配す。蓮弁はⅢ類よりも高く盛り上がり子葉はない。外区内縁に珠文24、外縁に凸鋸歯文がめぐっている。Ⅲ類軒丸瓦と比較すると、蓮弁と外区外縁の鋸歯文の表現が異なる以外は文様の配置はほとんど一致している(8)。このことからⅢ類の笵型の蓮弁と外区外縁を彫り直したものか、Ⅲ類軒丸瓦の笵型をかなり精密に模倣したものと考えられる。瓦当側面には笵型による段が認められる。また、瓦当裏面に布目の痕跡が残るものが1点あった。丸瓦取り付け位置は高く外区外縁付近である。瓦当面の径は17.0㎝、厚さは2.2㎝を測りⅢ類に比べて極端に薄い。

Ⅴ類　複弁九弁蓮華文軒丸瓦（6）

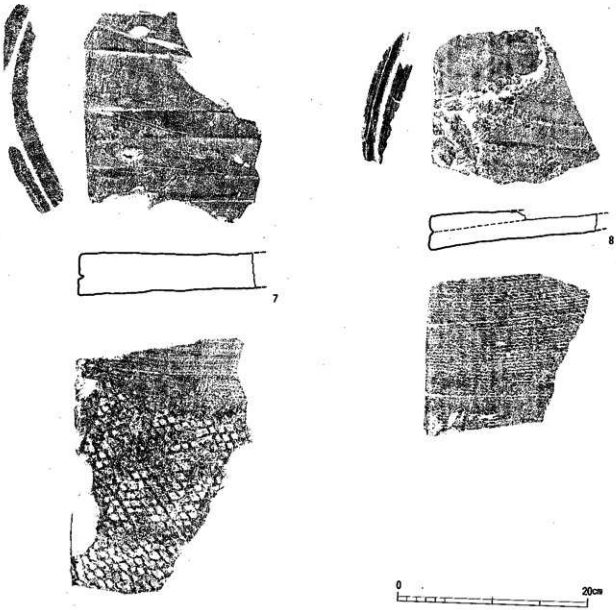
前回報告書で複弁八弁蓮華文軒丸瓦と分類されているものである。今回の調査では、瓦当面が欠損していない状態で出土し、複弁九弁軒丸瓦であることが分かった。2点出土している。中房は大きく圏線によって囲まれ、1＋6＋6の小さな蓮子を配置している。九つの蓮弁は線で表現され各



第22図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）



第23図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）



第24図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）

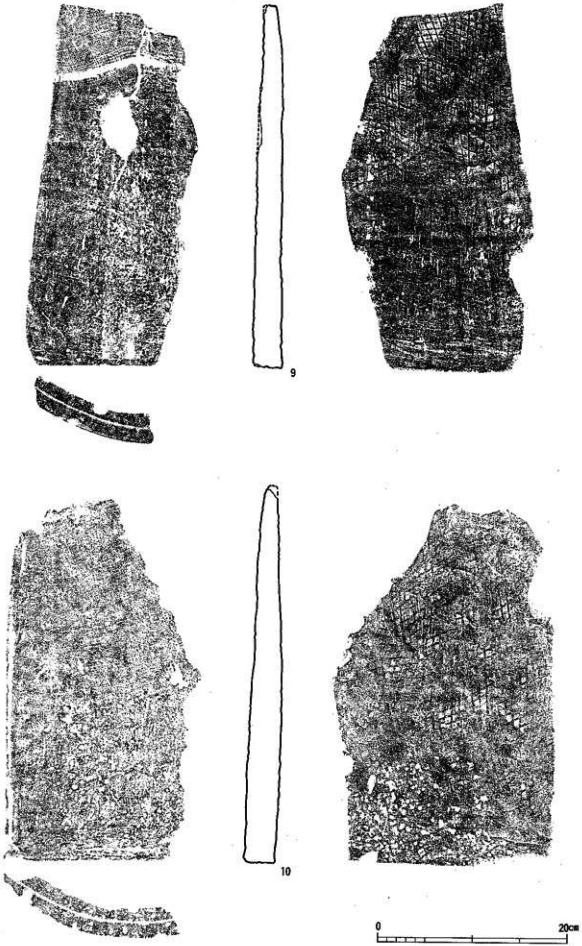
弁の大きさ、形は不揃いである。外区との間は、浅く細い圏線で区切られ、外区内縁の珠文は28、外縁は素文の直立縁である。瓦当面の径は18.5㎝、厚さ2.3㎝を測る。丸瓦取り付け位置はⅢ類と同様に高い。

軒平瓦

全部で58点が出土した。前回報告書で2型式3類に分類されている。重弧文軒平瓦をⅠ類、扁行唐草文軒平瓦をⅡ類としている。今回もこの分類に従って報告する。

Ⅰ類　重弧文軒平瓦（第22～25図、図版17）

52点が出土し、全体の90％を占める。平瓦の広端面に1本の沈線を施して二重弧文としている。



第25図　出土軒平瓦Ⅰ類拓影・実測図（1/4）

沈線の形からａ，ｂの２種類に、さらにａ類は瓦当の厚さ、沈線の大きさ、製作技法からイ～ホに細分を試みた(第２表)。

Ⅰａ類は沈線の断面が「コ」字形をなすもの。

イ（１・２）は瓦当面の厚さが3.2～4.0cmと比較的厚く、沈線が幅0.8cm、深さ0.7cm程度で他と比較して際立っている。凹面に施文具によると考えられる段差が瓦当面から幅2.5cmの範囲に残っている。凸面の叩き目はいずれも丁寧にナデ消されているため不明である。

ロ（７）は瓦当面の厚さが4.3～5.0cm、沈線が幅0.5cm、深さ0.4cm程度を測る。瓦当面が厚い割に沈線が細く浅い。凸面の叩き目は格子目である。

ハ（５・６）は瓦当面の厚さが3.0cm前後、沈線の幅0.5cm、深さ0.4cm程度である。凸面の叩き目は格子目である。

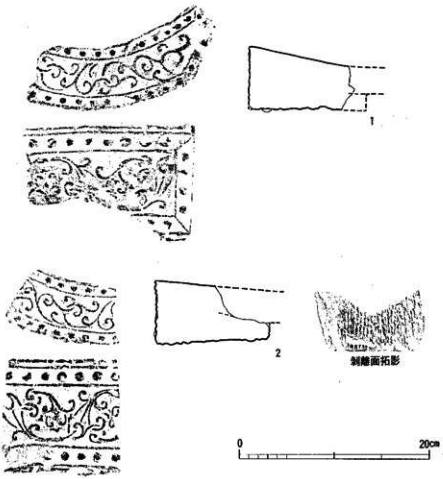
ニ（３・４）は瓦当面の厚さが2.5cm以下で他と比べて狭い。沈線は幅0.4cm前後、深さ0.1～0.4cm。凸面の叩き目が認められるものはいずれも格子目であった。

ホ（８）は凸面の叩き目が縄目であるもの。瓦当面の厚さは3.3～3.5cm、沈線の幅は0.4cm、深さ0.2～0.6cmで大きさはハに似ているが沈線断面の形状が「＞」に近いものもあり先端の尖った工具により施されたのではと考えられる。また、瓦当面を粘土板を貼り足すことで形成している様子が見られ、製作技法に他との違いが見られる。

Ⅰｂ類(９・10)は瓦当面の厚さが3.4～3.9cm、沈線は極めて浅く幅0.3cm前後、深さ0.1cm弱である。凹面の先端に施文具によるものと思われる痕跡が認められる。凸面はナデ或いはヘラケズリにより丁寧に調整されている。わずかに残る叩き目はすべて格子目であった。凹面は無調整で布目が残るものか、ナデやケズリが丁寧に施されているものとがあった。

Ⅱ類　扁行唐草文軒平瓦（第26図、図版17）

６点出土した。そのうち２点はⅦ区５号掘立柱建物跡の柱穴から出土し、再利用されていた。



第26図　出土軒平瓦Ⅱ類拓影・実測図（1/4）

第2表　軒平瓦Ⅰ類計測表

Ia

NO		出土地点	瓦当厚	沈線 幅	沈線 深	叩打痕	凸面の仕上げ	凹面の仕上げ	側面の仕上げ	備考
イ	1	Ⅱ 瓦溜	3.2	0.8	0.5	－	ナデ	ナデ	2	
	2	Ⅱ 瓦堆積	3.9	0.9	0.7	－	ナデ	ナデ	－	
	3	Ⅲ 表採	－	0.7	0.7	－	横方向のナデ	横方向のケズリ	1	
	4	Ⅳ T2P2	3.9	0.7	0.7	－	縦方向のナデ	横方向のナデ	－	
	5	Ⅳ T3	3.6	0.8	0.7	－	横方向のナデ	なし	2	第22図1
	6	Ⅴ T1	3.6	0.7	0.7	－	ナデ	ナデ	1	
	7	Ⅶ SK1 暗灰色粘土	4.0	0.9	0.8	－	ナデ	一部ナデ	1	第22図2
	8	Ⅶ SK7	3.4	0.8	0.7	－	横方向のナデ	ナデ	1	
ロ	1	Ⅱ 瓦堆積	4.3	0.4	0.4	格子目7	一部ナデ	一部縦方向のケズリ	1	第24図7
	2	Ⅱ 瓦堆積	4.3	0.7	0.4	－	磨滅により不明	ナデ	－	
	3	Ⅲ 表採	4.3	0.5	0.4	格子目7	なし	無方向のケズリ	2	
	4	Ⅳ T2P2	4.7	0.4	0.5	格子目7	なし	無方向のケズリ	2	
	5	Ⅳ T4 暗灰褐色土	3.6	0.5	0.3	格子目	ナデ	なし	－	
	6	Ⅶ 北区	(5.0)	0.5	0.4	格子目	ナデ	－	－	
ハ	1	Ⅱ 瓦堆積	2.6	0.5	0.2	格子目8	一部ナデ	なし	3	第23図3
	2	Ⅱ 瓦堆積	3.0	0.5	0.3	格子目	ナデ	なし	3	
	3	Ⅱ 瓦堆積	2.8	0.6	0.4	－	ナデ	なし	3	
	4	Ⅱ 暗灰褐色砂質土	3.2	0.5	0.5	－	ナデ	ナデ	2	
	5	Ⅲ T1	3.0	0.5	0.5	－	ナデ	一部ナデ	2	
	6	Ⅲ 黒灰色土	3.6	0.5	0.5	格子目7	なし	ナデ	1	第23図4
	7	Ⅳ T2P2	3.3	0.5	0.2	格子目	ナデ	なし	3	
	8	Ⅳ T3	3.0	0.5	0.4	格子目8	なし	なし	2	
	9	Ⅳ T4 暗灰褐色土	2.8	0.4	0.3	格子目8	一部ナデ	なし	－	
	10	Ⅳ T4 暗灰色土	3.4	0.5	0.3	格子目7	ナデ	なし	2	
	11	Ⅳ	3.6	0.5	0.3	－	ナデ	なし	2	
	12	表採	3.0	0.5	0.3	－	ナデ	なし	－	
ニ	1	Ⅱ 瓦堆積	1.6	0.3	0.1	格子目8	ナデ	なし	1	
	2	Ⅱ 瓦堆積	2.0	0.3	0.05	－	ナデ	なし	2	
	3	Ⅲ T1	1.9	0.4	0.2	格子目8	ナデ	なし	3	
	4	Ⅲ T1	2.3	0.5	0.1	－	ナデ	なし	2	
	5	Ⅳ T2P2	2.5	0.3	0.1	格子目7	ナデ	なし	－	
	6	Ⅳ T4 暗灰褐色土	2.5	0.4	0.4	－	ナデ	なし	－	
	7	Ⅳ T4 暗灰色土	2.4	0.4	0.4	－	ナデ	なし	－	第23図6
	8	Ⅶ SK1 暗灰色粘土	2.5	0.3	0.05	－	ナデ	なし	1	
	9	表採	2.2	0.5	0.4	格子目8	なし	なし	1	第23図5
ホ	1	Ⅱ 瓦堆積	3.3	0.4	0.6	縄目2	なし	ナデ	2	
	2	Ⅶ SE3	3.5	0.4	0.3	縄目2	なし	ナデ	1	第24図8
	3	Ⅶ 北区	3.5	0.4	0.2	縄目2	一部ナデ	ナデ	2	

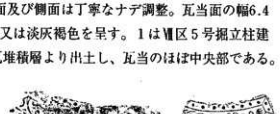
Ib

NO		出土地点	瓦当厚	沈線 幅	沈線 深	叩打痕	凸面の仕上げ	凹面の仕上げ	側面の仕上げ	備考
	1	Ⅱ 瓦堆積	3.4	0.4	若干	格子目8	ナデ	なし	1	第25図10
	2	Ⅱ 瓦堆積	3.5	0.4	若干	－	縦方向のヘラケズリ	磨滅により不明	1	
	3	Ⅱ 瓦堆積	3.4	0.3	若干	－	ナデ	なし	1	
	4	Ⅱ 瓦堆積	3.5	0.3	0.1	－	縦方向のナデ	縦方向のナデ	1	
	5	Ⅱ 瓦堆積	3.5	0.3	若干	－	ナデ	磨滅により不明	－	
	6	Ⅱ 瓦堆積	－	0.3	0.1	－	ナデ	－	－	
	7	Ⅲ T1	3.5	0.3	0.1	－	ナデ	ナデ	3	
	8	Ⅳ T3 暗灰褐色土	3.4	0.3	若干	格子目8	縦方向のケズリ	なし	1	第25図9
	9	Ⅳ T3	3.4	0.3	0.1	－	ナデ	ケズリ	2	
	10	Ⅳ T3	3.9	0.3	0.1	－	ナデ	磨滅により不明	1	
	11	Ⅶ SE3	3.5	0.2	0.1	格子目7	なし	縦方向のケズリ	3	
	12	Ⅶ SE3	3.5	0.3	0.1	－	縦方向のケズリ	縦方向のケズリ	1	
	13	表採	3.6	0.4	若干	－	ナデ	磨滅により不明	1	
	14	表採	3.6	0.3	0.1	格子目	ナデ	ナデ	1	

※　側面の仕上げは、側面のケズリの回数である。

瓦当面内区の文様は、右から左に流れる唐草文である。上下の外区に珠文を配置し、両脇区は2区画に分けてやはり珠文が配置されている。下顎面は左から右に流れる唐草文で瓦当面の文様に比べると装飾が華麗で手が込んでいる。外区は上下左右に区切られ、瓦当面よりも高く盛り上がった珠文をめぐらしている。平瓦の凸面から先端にかけて粘土を貼り足して瓦当部を形成。平瓦部はいずれも残っていなかったが、剥離した面に縄目が写しとられていた。この軒平瓦の平瓦凸面には縄目の叩き目が施されていたと考えて間違いない。凹面及び側面は丁寧なナデ調整。瓦当面の幅6.4～6.7㎝、下顎面の幅は11.5～12.3㎝を測り、暗灰色又は淡灰褐色を呈す。1はⅦ区5号掘立柱建物跡P8より出土し瓦当の右側にあたる。2はⅡ区瓦堆積層より出土し、瓦当のほぼ中央部である。

なお、嘉穂郡筑穂町所在の大分廃寺から同笵の軒平瓦が出土している。ただし、平瓦部が剥離した部分に写し取られている叩き目は正格子である。（第27図）



第27図　大分廃寺軒平瓦拓影

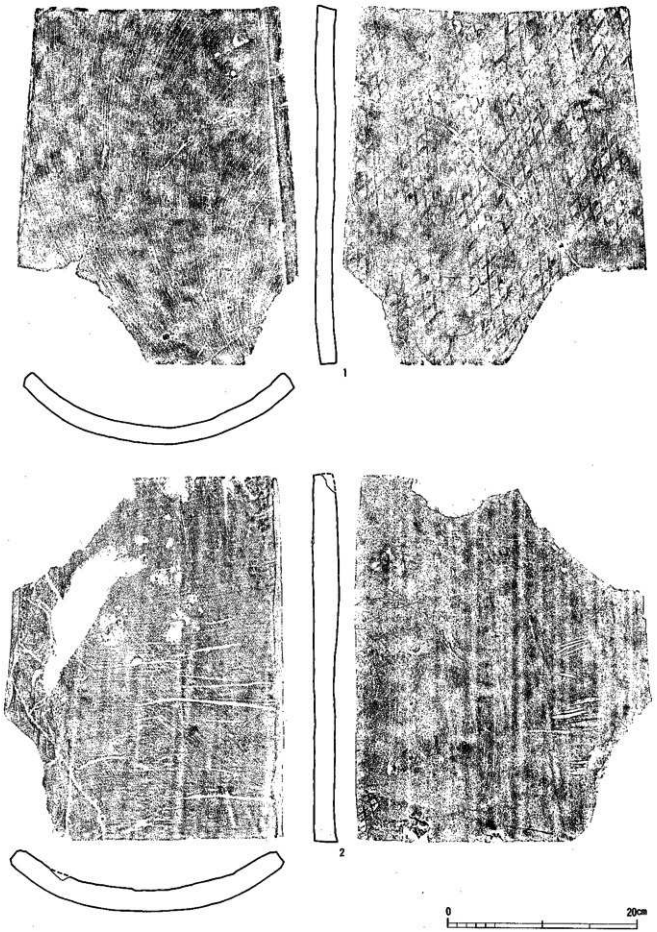
平瓦・丸瓦（第28～31図、図版18）

平瓦は土のう袋で約300袋分以上が出土した。ほとんど破片資料であったが、完形に復元が可能なもののうち数点を図示している。とくにⅦ区3号井戸の井筒として再利用されていた瓦は残存状態が良い。凸面叩きの種類は前回報告書で報告されている縄目4種類、格子目8種類（『椿市廃寺』p18・19）を越えるものではなく、従来の分類に従うこととする。

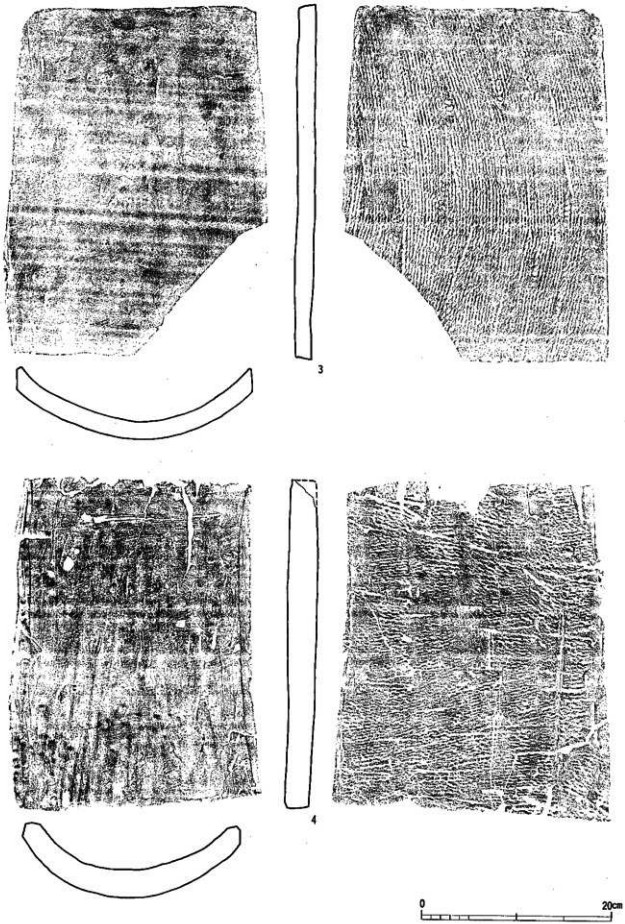
出土した平瓦ははすべて粘土板桶巻造りで、一枚造りと考えられるものは認められなかった。

1は凸面に格子目8の叩きをもつもので、長さ38.0㎝、厚さは約2㎝。凸面は叩きのあとナデ調整が行われ、凹面は無調整で粘土板糸切の痕跡が残っている。側面は1回のヘラケズリ。淡灰褐色を呈し、硬質である。Ⅶ区3号井戸の井筒として使用されていた。2は凸面が丁寧にヘラケズリ、ヘラナデが施されているがかすかに格子目7の叩き目が認められる。長さ38.5㎝、厚さ2.5㎝。凹面は無調整。側面は3回のヘラケズリで丁寧に面取りが行われている。淡灰色を呈し硬質。Ⅶ区1号土坑から出土。3は凸面に縄目2の叩き目をもつもの。長さ37.0㎝、厚さ1.8㎝で凹面は丁寧にヘラケズリが施されている。側面は2回のヘラケズリ。暗灰色を呈し、硬質。Ⅶ区3号井戸から出土し、やはり井筒として使用されていた。4は凸面に縄目3の叩きが施されているもの。長さ34.5㎝、厚さ3.0㎝を測る。凹面は丁寧なヘラケズリとナデ調整、側面は2回のヘラケズリである。暗灰色を呈し、硬質。焼成時の焼けひずみが激しい。Ⅱ区瓦堆積層から出土。5は凸面に格子目9の叩きをもつもの。凹面は一部にヘラケズリが施されている。厚さ2.9㎝、暗灰色を呈し硬質。Ⅱ区瓦溜から出土した。6は凸面に格子目11の叩きが見られるもの。凹面は一部にナデ調整が行われ、厚さ2.7㎝で側面は1回のヘラケズリ。灰色を呈しやや軟質である。Ⅶ区1号土坑から出土した。

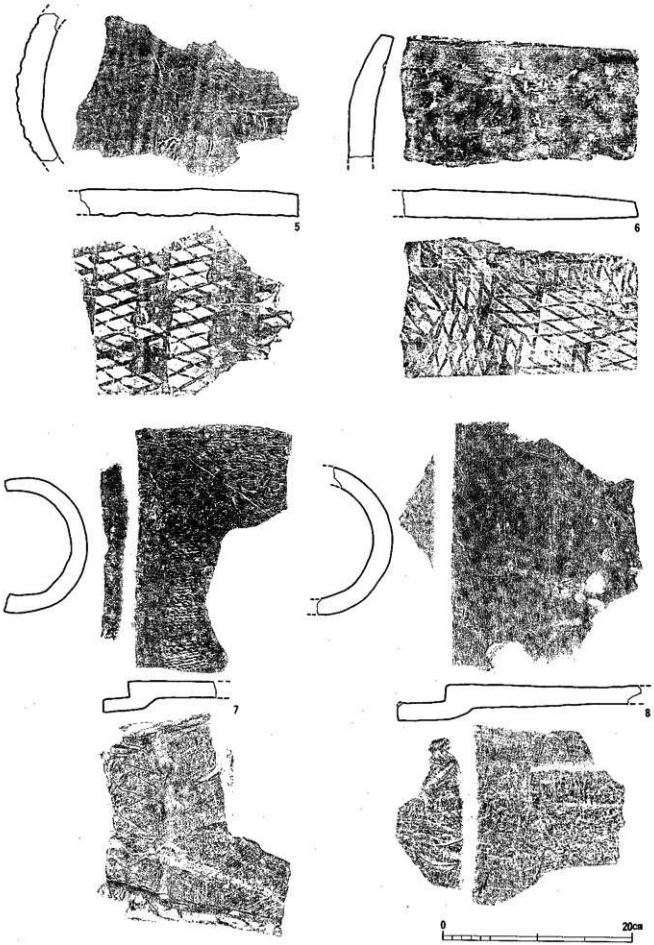
丸瓦は土のう袋で約210袋分が出土した。行基式丸瓦と玉縁式丸瓦がある。いずれも破片資料であるので全体の大きさは知り得ないが玉縁を持つものが全体の10％ほど確認された。玉縁部の長さにはばらつきがある。凸面はほとんど丁寧にすり消されているため叩き目が分からないものが多い



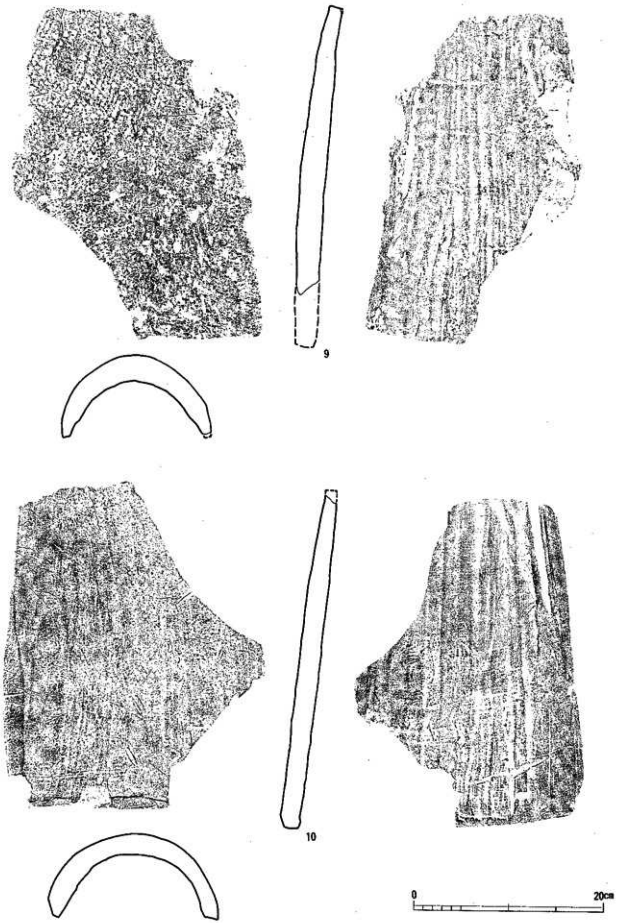
第28図　出土平瓦拓影・実測図（1/4）



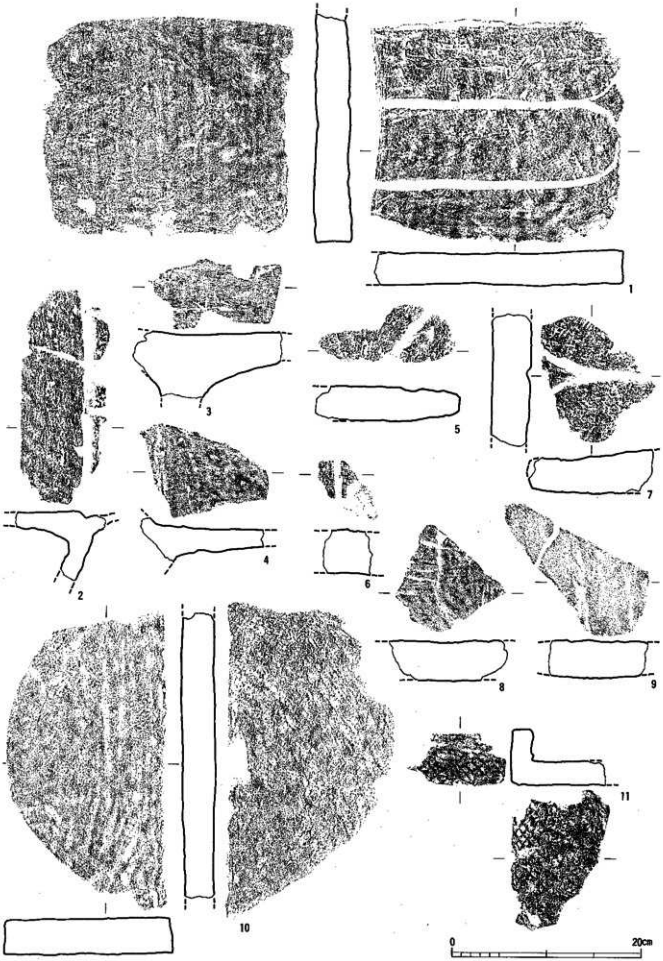
第29図　出土平瓦拓影・実測図（1/4）



第30図　出土平瓦・丸瓦拓影・実測図（1/4）



第31図　出土丸瓦拓影・実測図（1/4）



第32図　出土鴟尾・その他の瓦類拓影・実測図（1/4）

が、縄目と格子目がある。格子目は行基式丸瓦にのみ認められる。凹面には竹状模骨を使用したと考えられる痕跡を持つものがあり、それは行基式丸瓦に限定されていた。側面は1回のヘラケズリあるいは2～3回のヘラケズリによる面取りが施され、破面を残す瓦はわずかであった。

7は玉縁式丸瓦で長さ3.0cmの玉縁を持ち、厚さは1.5cmを測る。凸面にはヨコ方向のナデが施されているが縄目1の叩きがかすかに確認できる。凹面は通常の模骨で布目を残す。側面はヘラケズリ。灰色を呈し、軟質である。Ⅴ区から出土。8は玉縁式丸瓦で凹面に粘土板の貼り合わせの痕跡が見られる。玉縁の長さは5.0cmで厚さ2.5cmを測る。凸面はナデ調整でかすかに縄目叩きが残る。側面は凹面側に分割のための切り込みをつけ、凸面側に破面を残す。黒灰色を呈し硬質。凸面にススが付着している。Ⅳ区3トレンチから出土。9は行基式丸瓦で長さ35.8cm、厚さ2.8cmである。凸面は磨滅が激しく不明であるが格子目5の叩きがかすかに認められる。凹面には竹状模骨が使用されていると考えられる痕跡がある。竹状の材料を紐で綴った間隔は5.3～6.5cmで6箇所ある。側面は1～2回のヘラケズリが施され、面取りされている。淡灰褐色を呈しやや軟質。Ⅱ区木材集中地点から出土。10は行基式丸瓦で長さ35.6cm、厚さ2.2cmを測る。凸面は丁寧に縦方向にナデが施され、凹面を見ると通常の模骨が使われているようである。側面は1～2回のヘラケズリで面取りが行われている。淡灰褐色を呈しやや軟質。Ⅰ区出土。

鴟尾（第32図1～9、図版19）

破片13点が出土した。そのうち小片を除いた9点を図示した。1点がⅦ区20号土坑出土である以外はⅢ～Ⅴ区の講堂跡、金堂跡推定地の西側から出土している。

1、5～7は鰭部で幅約1.0cmの沈線により羽状文が表現されている。1は先端部分まで残っている。先端は半円状に丸みを持ち、これに合わせて端面が切り込まれている。いずれも胎土に砂粒を多く含み、全体にヘラケズリ、ヘラナデが施されている。1は厚さ約3.5cm、淡灰褐色を呈し、Ⅲ区出土である。5は鰭部の先端にあたり、薄手になっている。厚さは中央部で3.5cm、先端部の薄いところで1.5cmを測る。表面は灰色、内部は淡黄灰色。Ⅳ区3トレンチより出土。6はわずかに羽状文を表すと思われる沈線が見られる。厚さ4.5cmと他に比べて厚い。淡灰褐色を呈し、硬質である。Ⅳ区3トレンチ出土。7は鰭部先端にあたり、厚さは約3.0～4.5cmで先端に近いほど厚さが薄くなっている。1と異なり羽状文先端の間弁状になった部分の中央がやや盛り上がり、稜ができている。これは以前調査時に出土したものにも認められ、よく似ている。淡赤褐色を呈し、粗砂を多く含む。Ⅶ区20号土坑から出土。

2～4は腹部との接合部にあたる。2は薄手で厚さ約2.0cmを測る。淡灰褐色を呈しやや軟質である。Ⅳ区4トレンチ暗灰褐色土より出土。3は非常に厚手で約4.0cmを測る。暗灰色を呈し、硬質である。Ⅳ区3トレンチ出土。4はやはり薄手で約2.0cmを測る。淡灰褐色を呈しやや軟質である。Ⅳ区3トレンチから出土。

8、9は部位は判断しかねるがおそらく胴部にあたると思われる。8は厚さ約4.0cmで砂粒を多く含み暗灰色を呈し、硬質である。Ⅳ区3トレンチ出土。9は厚さ4.0cmを測り砂粒を多く含み淡灰褐色を呈する。Ⅴ区出土。

以上の鴟尾片のうち1、2、4、9と3、8は胎土、色調がそれぞれ似ており、同一個体とみなしてよいだろう。

その他の瓦類（第32図10・11、図版20）

10は横断面が長方形を呈し、厚さ3.5cmを測る。平面は半円形であるが上下の端部は破面である。どのような形状に復元できるかは分からず、用途も不明。胎土は砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。両面及び側面には丁寧にナデが施されている。胎土、色調が鴟尾と非常に似ている。Ⅴ区出土。11は破片であるため正確な形状は不明である。表面には瓦と同様の格子目の叩き目が施され、ナデ調整が行われている。断面形はほぼ直角に折れ曲がり、上端部及び裏面もナデが施されている。砂粒を多く含み表面は灰色、裏面は黒灰色を呈す。隅木蓋の可能性がある。Ⅶ区１号土坑出土。

（２）土器類

土器類はほとんど土師器と須恵器であり、黒色土器が数点出土している。Ⅰ～Ⅴ区では遺構出土のものは少なくほとんどトレンチ調査による包含層からの出土で破片資料である。Ⅶ区では、３号井戸と１号土坑からかなりまとまって出土し、完形に近いものも多い。以下、各区ごとに報告する。

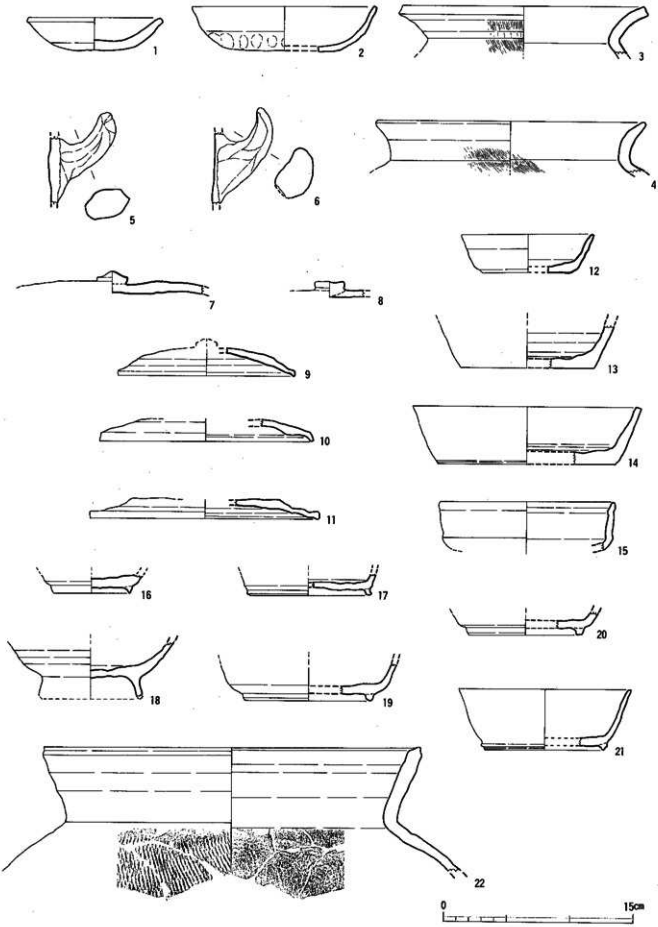
Ⅱ区出土土器（第33図、図版21）

土師器（１～６、18）

１、２は坏である。１は復元口径10.3cm、器高は2.5cm。底部は丸底に近く口縁部は直線的に開きやや外傾している。全体にナデ調整。色調は淡茶褐色を呈する。１トレンチ暗灰色粘質土より出土。２は復元口径14.4cm、器高3.4cm。丸みを帯びた底部で外面に指頭圧痕が残る。内外面ともナデによる調整。色調は茶褐色を呈する。４トレンチ出土。３、４は甕の口縁部である。３は復元口径18.9cmで全体にナデ調整、外面に縦方向に刷毛目。色調は暗茶褐色で１トレンチ黒灰色粘質土より出土。４は復元口径21.0cmで内外面ともに細かい刷毛目調整。外面は淡赤褐色、内面は茶褐色を呈する。１トレンチ明灰色砂質土より出土。５、６は甑の把手である。いずれも先端が細く面取りされ丁寧にナデ調整されている。５は淡灰褐色で１トレンチ暗灰色粘質土より出土。６は淡黄褐色で４トレンチ出土。18は椀で復元底径7.9cmを測る。体部の稜が明瞭で長く伸びた高台を持つ。底部は回転ヘラ切りで内外面とも回転ナデ調整。胎土は精良で淡赤褐色を呈する。瓦溜より出土。

須恵器（７～17、19～22）

７～11は蓋である。７は擬宝珠様つまみを有し、外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整で天井部はナデ調整。淡灰褐色を呈する。１トレンチ出土。８は偏平なつまみの部分で暗灰色を呈する。４トレンチ出土。９は復元口径13.9cm、口縁端部が屈曲しくちばし状を呈し、外面は回転ヘラケズリ後に回転ナデ、内面は回転ナデ。色調は灰褐色。１トレンチ暗灰色砂質土より出土。10は復元口径16.7cm、外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデが施され、淡灰色を呈す。７トレンチ暗灰色粘質土より出土。11は復元口径18.0cm、天井部が平坦で口縁端部は下方に屈曲する。焼成はやや不良で、淡灰色を呈す。１トレンチ出土。12～15は無高台の坏。12は小型で復元口径10.3cm、器高2.9cmを測る。底部は回転ヘラ切り、内外面は回転ナデ調整で暗灰色を呈する。１トレンチ暗灰色砂質土より出土。13、14は底部がほぼ水平で胴部が直線的に開いたもの。13は復元底径10.4cmで内外面とも回転ナデ調整。淡黄灰色で４トレンチ出土。14は復元口径18.0cm、復元底径13.8cm、器高4.4cm、胴部下方に回転ヘラケズリが施されている。色調は灰色を呈する。１トレンチ暗灰色粘質



第33図　Ⅱ区出土土器実測図（1/3）

土より出土。15は復元口径13.8cmを測り、胴部と底部との境に稜があり、内外面とも回転ナデ調整。暗灰色を呈する。1トレンチ暗灰色粘質土より出土。高坏の坏部か。16、17、19～21は高台を有す坏である。16は復元底径6.0cmと小さく、断面三角形の低い高台が付く。底部はヘラ切り未調整、内面は回転ナデ調整。淡灰色を呈する。1トレンチ暗灰色砂質土より出土。17は復元底径9.0cmで細く低い高台が付く。底部は回転ヘラ切りで内面は回転ナデ調整。明灰色を呈する。2トレンチ暗灰色粘質土より出土。19、20は高台先端がやや丸みを帯びている。19は復元底径9.9cm、焼成が悪く軟質で淡黄褐色。20は復元底径8.9cmで明灰色を呈する。いずれも1トレンチ暗灰色粘質土より出土。21は復元口径13.5cm、復元底径9.3cm、器高4.6cmを測る。内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色を呈する。1トレンチ黒灰色粘質土より出土。22は甕の口縁部である。復元口径29.5cm、外面に平行叩き、内面に同心円の叩きを施す。色調は淡灰色。包含層より出土。

第34図　Ⅲ区出土土器実測図（1/3）

Ⅲ区出土土器（第34図、図版21）

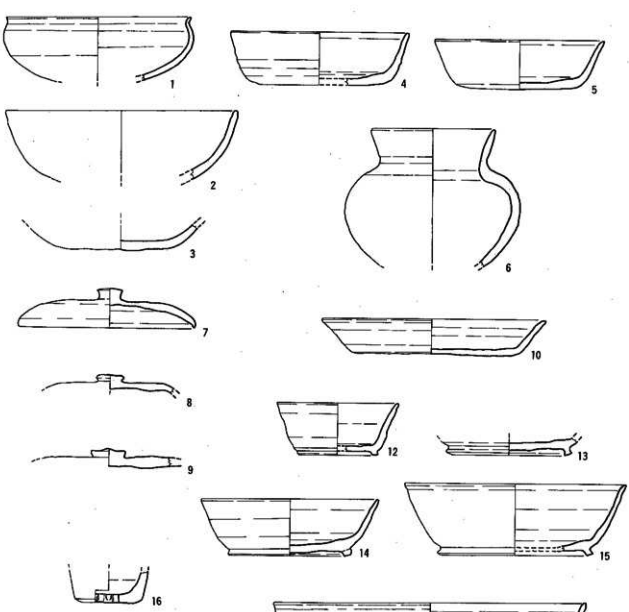
須恵器

1、2は蓋である。1は復元口径17.4cm、器高3.5cmを測り、やや丸みのある体部に偏平なつまみを貼付する。口縁部はくちばし状を呈す。天井部外面はヘラ切り未調整で内面はナデ調整。色調は淡黄灰色で1トレンチ暗灰色粘質土より出土。2は復元口径17.2cm、天井部は平坦でヘラ切り未調整、内面は回転ナデ調整。口縁部は屈曲しくちばし状に尖る。淡灰色を呈する。1トレンチ灰色粘質土より出土。3、4は坏の底部である。3は復元底径7.5cmで外側に開く低い高台を貼付し、内外面とも回転ナデ調整、底部内面はナデ調整。灰色を呈する。暗灰褐色土より出土。4は復元底径9.5cm、断面台形を呈する低い高台を付し、色調は灰色。1トレンチ灰色粘質土より出土。

Ⅳ区出土土器（第35図、図版21）

土師器（1～6）

1～5は坏である。1は復元口径14.2cm、底部はほぼ丸底に近くなると考えられ、胴部は丸く膨れ、口縁部が短く立ち上がる。器壁は比較的薄く内外面にナデ調整。色調は赤褐色で外面の一部は黒色。5トレンチ出土。2は復元口径18.4cmを測る。口縁部はゆるやかに開き、内外面ともヘラミガキ。赤褐色を呈する。2トレンチP2より出土。3は平底に近い底部で外面には指頭圧痕が見られる。内外面ともヘラミガキが施されている。淡黄褐色を呈する。2トレンチP2より出土。4は復元口径14.0cm、器高4.1cmを測る。平底で口縁部は直線的に外側に開く。底部は回転ヘラ切り、

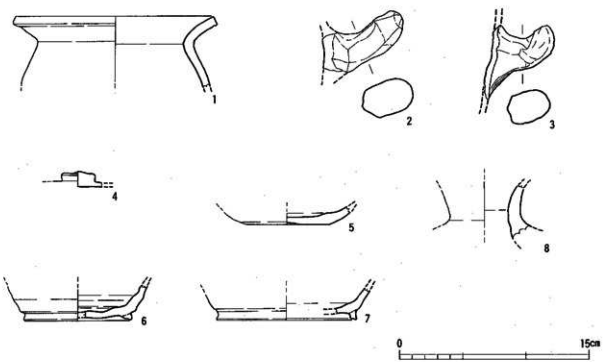


第35図　Ⅳ区出土土器実測図（1/3）

内外面に回転ナデ調整を施している。色調は暗灰褐色で外面の一部に高熱を受けて溶解したような箇所がある。3トレンチ暗灰褐色土より出土。5は復元口径13.4cm、器高3.9cmを測り、平底である。口縁端部はやや外反している。底部は回転ヘラ切りで内外面とも回転ナデ調整。灰褐色を呈し内面の一部に黒色の溶解物が付着している。3トレンチより出土。6は小型の壺で口径9.6cm、胴部最大径13.9cmを測る。胴部はほぼ球形で口縁部は外反する。外面の器壁は荒れて剥離している。何度も高熱を受けたためであろうか。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内外面はナデ調整で底部内面には指によるナデの痕跡がある。色調は茶褐色で外面の一部は黒褐色を呈する。5トレンチ出土。

須恵器（7～16）

7～9は蓋である。7は復元口径14.0cm、器高3.0cmで体部は丸みをもって口縁部で屈曲する。小ぶりなボタン状のつまみがつく。外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整である。淡灰褐色を呈する。3トレンチ出土。8は偏平な小さなつまみをもつ。外面は回転ナデ、内面はナデ調整。灰色を呈する。2トレンチＰ２より出土。9は偏平な擬宝珠様のつまみをもつ。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整である。灰色を呈する。3トレンチ出土。10は皿である。復元口径18.0cm、器高2.2cm。体部は外傾し、口縁部はやや外反する。底部に粘土紐巻き上げ痕が残る。内外面に回転ナデ調整、底部内面はナデ調整。淡灰色を呈する。3トレンチ出土。11～15は坏でいずれも高台がつく。11は復元口径24.8cm、器高6.3cm。体部はやや内湾し口縁部で外反。高台は底部の内側に貼付され、断面四角形を呈する。内外面とも回転ナデ調整。色調は淡灰色。2トレンチＰ２より出土。12は復元口径9.6cm、器高4.1cmで小型である。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。内外面とも回転ナデ調整で底部内面はナデ調整。灰色を呈する。3トレンチ出土。13は復元底径10.0cm、高台は断面四角形で外側に張る。底部は回転ヘラ切りで内面は回転ナデ調整。暗灰色を呈する。3トレンチより出土。14は完形で出土し、口径14.0cm、底径9.2cm、器高4.5cmを測る。体部は直線的に開き、高台は外側に張る。底部回転ヘラ切りで、内外面は回転ナデ調整。胎土は砂粒を多く含み、色調は黒色を呈する。3トレンチ出土。15は復元口径17.4cm、器高5.6cmを測る。体部はやや内湾ぎみに開いて口縁部は外反し、高台は外側に張る。内外面とも回転ナデ調整。灰色を呈する。2トレンチＰ２より出土。16は穿孔の施された底部で、器種は不明である。底径は4.1cm。平坦な底部の内側から数回ほど刺突されている。内外面はなめらかにナデ調整されている。胎土は細砂粒を含み、焼成は悪く外面が灰色、内面は淡灰褐色を呈する。3トレンチ出土。



第36図　Ｖ区出土土器実測図（1/3）

Ⅴ区出土土器（第36図）

土師器（1～3）

1は甕の口縁部である。復元口径15.8cm。内外面にヨコナデ調整が施されている。胎土は砂粒を多く含み、色調は茶褐色を呈する。包含層より出土。2、3は甑の把手である。2は丁寧に面取りされ全体的に丸みがある。淡黄灰色を呈する。包含層より出土。3は先端部が上方に屈曲し下面に胴部から続く刷毛目が施されている。淡赤褐色を呈する。2トレンチより出土。

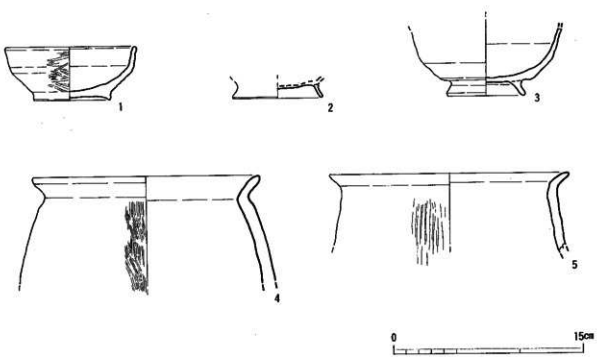
須恵器（4～8）

4は蓋で偏平なつまみが付く。灰色を呈する。2トレンチより出土。5～7は坏である。5は復元底径7.0cm、底部は未調整で内面は回転ナデ調整。灰色を呈する。1トレンチより出土。6は復元底径8.6cm、高台は断面三角形。底部は回転ヘラ切り、内外面に回転ナデ調整で色調は淡灰色。包含層より出土。7は復元底径11.2cm、高台は断面四角形。内外面に回転ナデ調整で色調は暗灰色。8は長頸壺の頸部で内外面とも回転ナデ調整。色調は赤紫色。7、8は2トレンチより出土。

Ⅶ区柱穴出土土器（第37図）

土師器（4、5）

4は甕である。「く」字状に屈曲した口縁部は短く、外面に細かい刷毛目が縦位に施されている。砂粒を多く含み茶褐色を呈する。P82より出土。5は甕で復元口径19.0cmを測る。口縁部は強く屈曲し短い。外面に粗い刷毛目を施す。色調は赤褐色。5号掘立柱建物跡P8より出土。



第37図　Ⅶ区柱穴・1号井戸出土土器実測図（1/3）

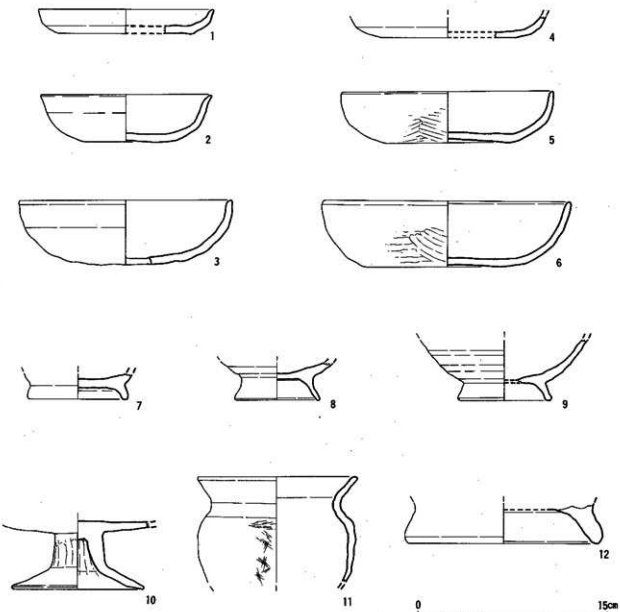
Ⅶ区１号井戸出土土器（第37図、図版21）

土師器（３）

３は椀で底径6.2cmを測る。体部は丸みがあり底部は平坦、高台は外側に張り出す。全体に回転ナデ調整、底部内外面はナデ調整。胎土は精良で焼成はやや甘い。色調は淡茶褐色で一部黒褐色。

黒色土器（１、２）

１、２とも椀である。１は完形で出土し、口径10.5cm、底径6.0cm、器高4.2cmを測り小型である。丸みをもつ体部から直線的に口縁部が立ち上がり、断面三角形の高台を付す。内外面にヘラミガキが施されている。高台付近は回転ナデ調整。胎土は精良。内面は黒色に燻され、外面は淡茶褐色を



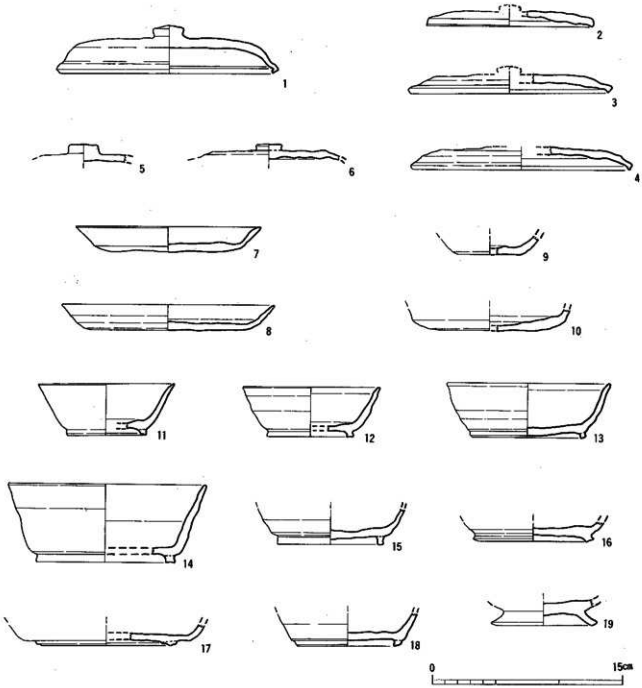
第38図　Ⅶ区３号井戸出土土師器実測図（1/3）

呈する。黒色土器A類で丁寧な造りである。2は底部のみであるが同一個体と考えられる胴部の破片が出土している。復元底径は7.1cmで、器壁が非常に薄い。高台部分は回転ナデ調整、胴部片は内外面ともヘラミガキが施されている。黒色土器B類で内外面とも黒色を呈する。

Ⅶ区3号井戸出土土器（第38～40図、図版21・22）

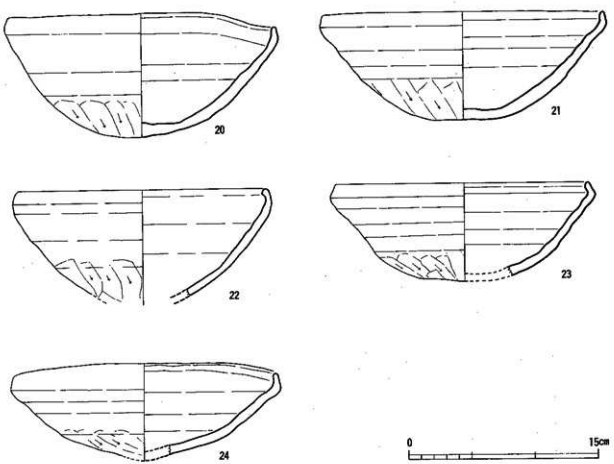
土師器（第38図、図版21）

1は皿で、復元口径14.0cm、器高1.9cmを測る。全体はナデ調整され、底部に指頭圧痕が見られ



第39図　Ⅶ区3号井戸出土須恵器実測図（1/3）

る。胎土は精良で硬質。茶褐色を呈する。2～6は坏である。2は復元口径13.6cm、器高3.7cmを測る。底部は平坦面をつくり、外面に指頭圧痕が見られる。内外面ともナデ調整。赤褐色を呈する。3は復元口径16.9cm、器高5.0cmで丸底の底部に外側から長径4.0cmの楕円形の穿孔が施されている。口縁部はやや内湾する。外面は手持ちヘラケズリ後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが施されている。底部外面には指頭圧痕が見られる。色調は淡茶褐色で内面の一部は黒色。4は復元底径10.4cmを測る。赤褐色を呈する。5は口径16.6cm、器高4.0cmを測る。6は口径19.7cm、器高5.2cmを測り、大型である。5、6とも全体にヘラミガキが施され、底部外面には指頭圧痕が見られる。胎土は精良で硬質。色調は赤褐色を呈する。5は外面の一部に赤色顔料が残る。7～9は椀である。7は底径7.8cmを測り、内面はヘラミガキが施されている。色調は内面が黒色、外面は淡茶褐色を呈する。8は復元底径6.6cmを測り、高台は細く外側に開き2.0cmの長さをもつ。外面は回転ナデ、内面はナデ調整。淡灰褐色を呈する。9は底径7.1cm、直線的に外側に張り出した高台を付す。全体に回転ナデ調整。外面は黒色、内面は黒灰色を呈する。10は高坏で脚部は短く、底径10.2cmを測る。脚筒部は円筒形で丁寧に面取りがなされ、脚端部は外側に強く屈曲し先端はほぼ水平になる。脚部内面はナデ調整でシボリの痕跡が見られる。坏部の底部は平坦で内外面ともナデ調整。淡黄褐色を呈する。11は小型の壺で口径12.6cm。体部はほぼ球形で口縁部は外反。胴部外面には無方向に単位の小さい刷毛目、内面はナデ調整、口縁部内外面にはヨコナデが施されている。火を受け器壁が剝離し

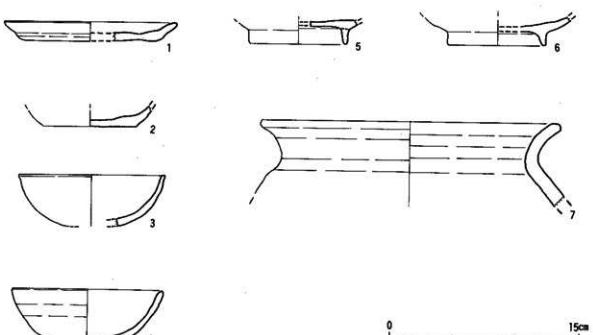


第40図　Ⅷ区3号井戸出土須恵器実測図（1/3）

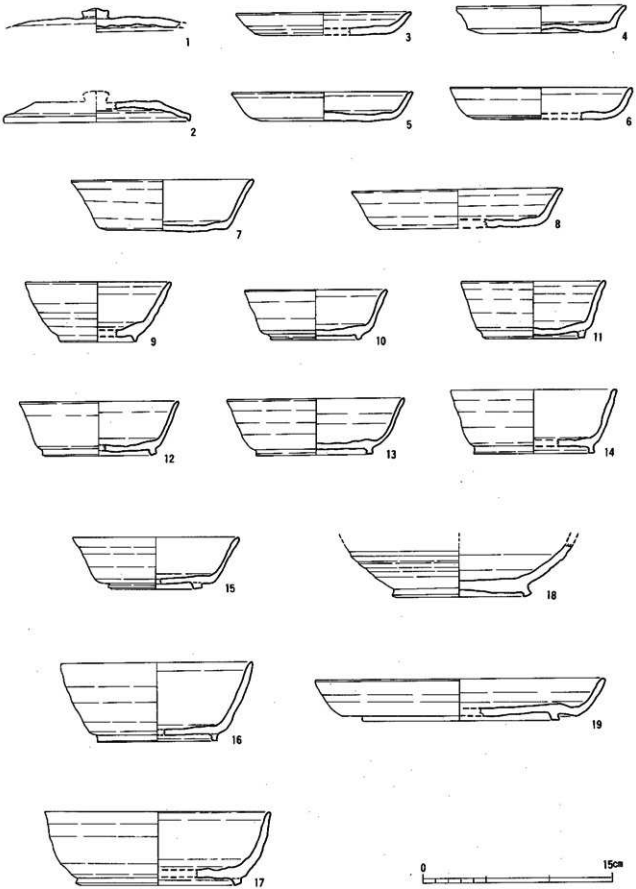
ている。暗茶褐色で一部は黒色、淡赤色を呈する。12は壺の高台部分で復元底径10.5cmを測り、非常に厚手。「ハ」字状に開いた先端部は丸みを帯びる。内外面とも回転ナデ調整。色調は淡褐色。

須恵器（第39、40図、図版22）

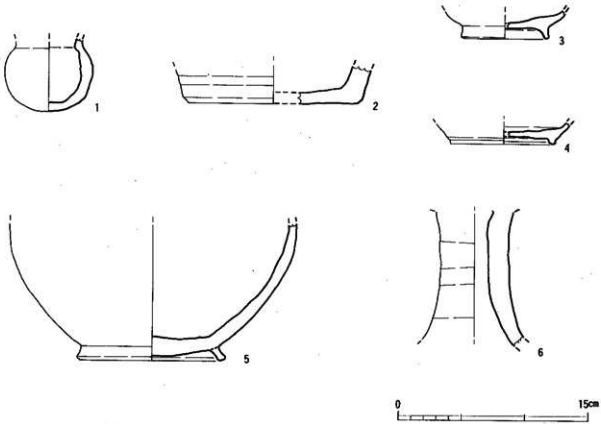
1～6は蓋である。1は復元口径16.6cm、器高3.8cmを測り、天井部は丸みをもち口縁端部は強く内側に屈曲する。中心部がやや尖ったつまみを貼付する。天井部外面には粘土紐巻き上げの痕跡があり、内面はナデ調整。口縁部は内外面とも回転ナデ調整。焼成時の火ぶくれが見られる。色調は淡灰色を呈する。2～4はいずれも天井部が平坦で2は口縁端部を少し尖らすだけでほとんどつくっていない。3、4の口縁端部は屈曲し断面が三角形を呈する。2は復元口径13.2cmで内外面は回転ナデ調整、暗灰色を呈する。3は復元口径15.8cmで内外面は回転ナデ調整、淡灰色を呈する。4は復元口径17.2cmで外面は回転ヘラケズリ、内面は口縁部が回転ナデ調整、天井部はナデ調整が施されている。黒灰色を呈する。5は中心のやや尖るつまみをつけ、淡灰色を呈する。6は偏平で小ぶりなつまみをつけ、天井部内外面にナデ調整。灰色を呈する。7、8は皿である。体部は直線的に開く。底部は回転ヘラ切りで内面はナデ調整、体部は回転ナデ調整。7は復元口径14.8cm、器高2.0cmで灰褐色を呈する。8は復元口径17.0cm、器高2.0cmで淡灰褐色を呈する。9～18は坏である。9は復元底径5.0cmで底部は回転ヘラ切り、内外面に回転ナデ調整。灰褐色を呈する。10は復元底径8.0cmで調整は不明。灰色を呈する。11～19は高台を付すものである。11、12は小型で体部内外面は回転ナデ調整が施されている。11は復元口径10.7cm、器高4.0cmを測り、淡灰色を呈する。12は復元口径10.9cm、復元底径6.8cm、器高3.9cmで淡灰色を呈する。13は復元口径12.8cm、器高4.2cmを測る。底部は回転ヘラ切り、体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整。淡灰褐色を呈する。14は復元口径15.6cm、器高6.2cm。体部は直線的に開き内外面に回転ナデ調整が施されている。色調は暗灰褐色。15は復元底径8.2cm、高台は断面四角形を呈し、直立する。底部には板



第41図　Ⅶ区1号土坑出土土師器実測図（1/3）



第42図　Ⅶ区１号土坑出土須恵器実測図（1/3）



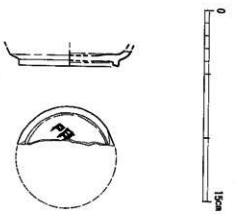
第43図　Ⅶ区土坑群出土土器実測図（1/3）

状圧痕が見られる。体部外面と底部内面には回転ナデが施されている。淡灰褐色を呈する。16は底径8.5cmで低く外側に張る高台をもつ。底部は回転ヘラ切り。灰色を呈する。17は復元底径10.2cmを測り、非常に低い高台を貼付する。底部は回転ヘラ切りで内面はナデ調整。灰色を呈する。18は復元底径7.4cm、体部外面には回転ナデ調整が施されている。淡黄灰色を呈する。19は復元底径7.5cmで外側に開いた高台を付す。淡灰色を呈する。20～24は鉢である。いずれも鉄鉢形で底部はやや平坦面をもつものから尖底に近いものまである。口縁部は内側に屈曲する。体部内外面は回転ナデ調整、底部の内面はナデ、外面はヘラケズリ。20は復元口径19.6cm、器高9.8cmで淡灰色を呈する。21は復元口径22.2cm、器高8.4cmで、灰色を呈する。22は口径21.2cmで、淡茶褐色を呈する。23は口径20.0cm、器高7.8cmで灰色を呈する。24は復元口径20.8cm、器高7.6cm。灰褐色を呈する。

Ⅶ区１号土坑出土土器

土師器（第41図、図版22）

１は皿で、復元口径13.8cm、器高1.5cmを測る。調整は不明で赤褐色を呈する。２～６は坏である。２は復元底径7.3cmで調整は不明。赤褐色を呈する。３、４は丸底で、３は復元口径11.6cm、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。赤褐色を呈する。４は復元口径12.0cm、調整は不明。赤褐色を呈する。５、６は高台を付したものである。５の高台は直立し、復元底径7.5cmを測る。底部は回転ヘラ切り。赤褐色を呈する。６の高台はやや外反



第44図　出土墨書土器実測図（1/3）

し復元底径7.7㎝。赤褐色を呈する。7は甕の口縁部。復元口径23.2㎝で、淡茶褐色を呈する。

須恵器（第42図、図版22）

1、2は蓋である。1は擬宝珠様のつまみをもち、天井部外面に粘土紐巻き上げの痕跡がある。内外面に回転ナデ、天井部内面はヨコナデ調整。淡灰褐色を呈する。2は復元口径14.7㎝、天井部が平坦で口縁部は屈曲する。内外面に回転ナデ調整が施されている。灰色を呈する。3－6、8は皿である。いずれも回転ヘラ切りで、回転ナデ調整、3の底部内面はナデ調整されている。3は復元口径13.8㎝、器高1.8㎝を測り灰色を呈する。4は底部との境がはっきりしている。復元口径13.6㎝で淡灰色を呈する。5はほぼ完形で口径14.3㎝、器高2.2㎝を測り、淡灰色を呈する。6は復元口径14.2㎝、器高2.5㎝で色調は淡灰色。8は復元口径16.5㎝、器高2.9㎝で淡灰色を呈する。

7、9～17は坏である。7は高台をもたないもので、底部は回転ヘラ切りで体部には回転ナデ調整が施されている。7は口径14.2㎝、器高3.9㎝を測り、淡黄灰色を呈する。9～17は高台を付すものである。9～16では体部は直線的に開き、口縁端部は外反ぎみである。17は体部がやや内湾し、口縁端部が外反する。底部切り離しがわかるものはすべて回転ヘラ切りで、内外面に回転ナデ調整が施されている。9は復元口径11.3㎝、器高4.6㎝、高台断面は三角形で淡灰色を呈する。10は復元口径11.2㎝、器高3.9㎝、色調は暗灰色。11は復元口径11.2㎝、器高4.4㎝、色調は淡黄灰色。12は復元口径12.5㎝、器高4.2㎝、色調は淡黄灰色。13は口径13.9㎝、器高4.3㎝、色調は灰色。14は復元口径12.9㎝、器高4.9㎝、色調は淡灰色。15は復元口径12.9㎝、器高4.0㎝、色調は灰色。16は復元口径14.9㎝、器高6.1㎝、色調は灰色。17は復元口径18.0㎝、器高5.8㎝、色調は暗灰色。18は壺の底部で高台を貼付する。底径10.1㎝。底部は回転ヘラ切りで体部内外面に回転ナデ、底部内面はナデ調整。灰色を呈する。19は高台付きの皿である。底部の内側に断面四角形の高台を付す。全体に回転ナデ調整が施されているが、底部の高台より外側は回転ヘラケズリ。暗灰色を呈する。

Ⅶ区土坑群（2～19号土坑）出土土器（第43図、図版22）

土師器（1、2）

1は小型の壺で、胴部外面は細かな刷毛目、内面はナデ調整。胎土は砂粒を多く含み硬質。淡茶褐色を呈する。11号土坑出土。2は坏の底部で底径6.5㎝。赤褐色を呈する。堆積土より出土。

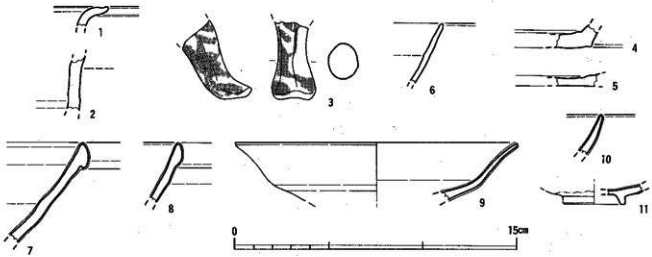
須恵器（3～6）

3は壺の底部で、復元底径13.4㎝。底部外面がナデ調整のほかは回転ナデ調整が施されている。外面は黒色、内面は淡灰色を呈する。4は坏の底部で復元底径8.4㎝。底部は回転ヘラ切りで内外面に回転ナデ調整が施され、淡灰色を呈する。14号土坑出土。5は短頸壺で底径11.4㎝を測る。球形の胴部に外側に強く張り出した高台が付く。高台部分は回転ナデ、胴部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整。淡灰色を呈する。5号土坑出土。6は高坏の脚部で内面にシボリの痕跡が見られる。内外面とも回転ナデ調整。淡黄灰色を呈する。3、6は土坑群堆積土より出土。

その他の土器

墨書土器（第44図、図版22）

須恵器の坏である。高台の内側に墨書がある。「明」か。復元底径8.0㎝、全体に回転ナデ調整が施され、灰色を呈する。機械による表土剥ぎの排土中より採取した。（村上）



第45図　出土陶磁器実測図（1/2）

（3）陶磁器類（第45図・巻頭図版5）

白釉緑彩（1～4）

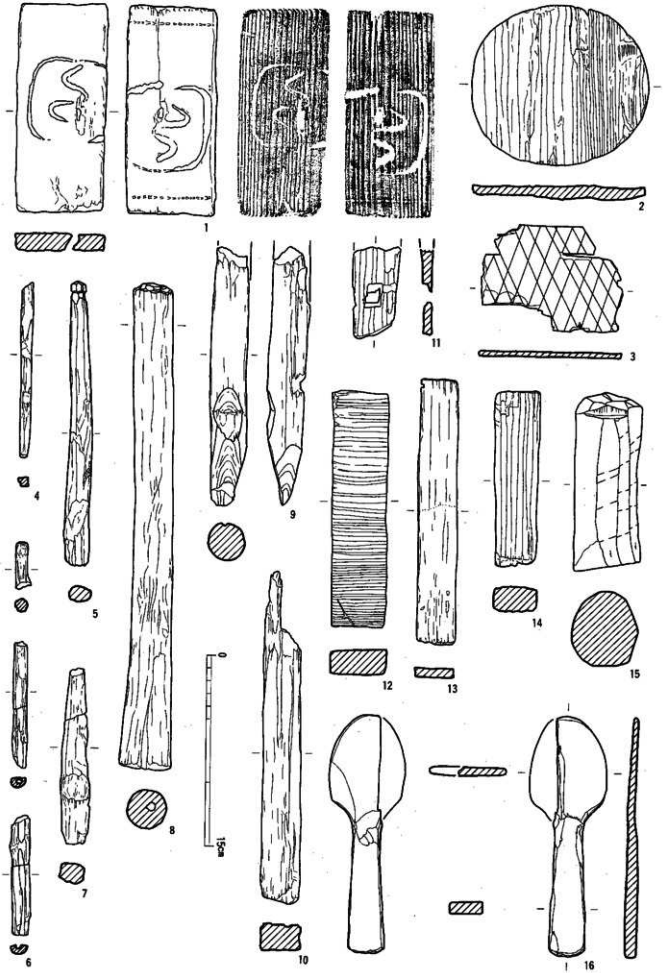
4点出土した。いずれも土師質であり、細片である。1～3は、釉や胎土の色調などが似ていることから、同一個体とも考えられる。また、それぞれの一部分が元の鉛釉の色（暗灰褐色）に還っていることから二次的な熱を受けたと思われ、小形の鍑あるいは火舎の一部であるとみられる(註)。1は口縁部破片である。内面には濃緑色の釉がかけられるが一部暗灰褐色に変色し、外面には淡黄色と濃緑色の釉がかけられる。胎土は灰白色を呈する。Ⅱ区2トレンチの暗灰褐色粘質土より出土。なお、1は二彩の可能性も考えられる。2は胴部破片である。内面には濃緑色の釉がかけられ、外面にも濃緑色の釉がかけられるが暗灰褐色に変色している。胎土は灰白色を呈する。Ⅱ区1トレンチより出土。3は脚部である。暗灰褐色の還元釉の上に濃緑色と黄色味を帯びた白色の釉がかかった恰好となっている。側面には刷毛目による調整痕が残り、脚の裏側にも釉が施される。胎土は灰白色を呈する。Ⅱ区2トレンチの暗灰色粘質土より出土。4は底部破片である。内面の体部との境に1条の沈線が廻り、底部側にはヘラミガキがなされる。釉は濃緑色と白味を帯びた薄緑色で、両面に施される。胎土は灰白色を呈する。Ⅰ区西側より出土。

緑釉陶器（5・6）

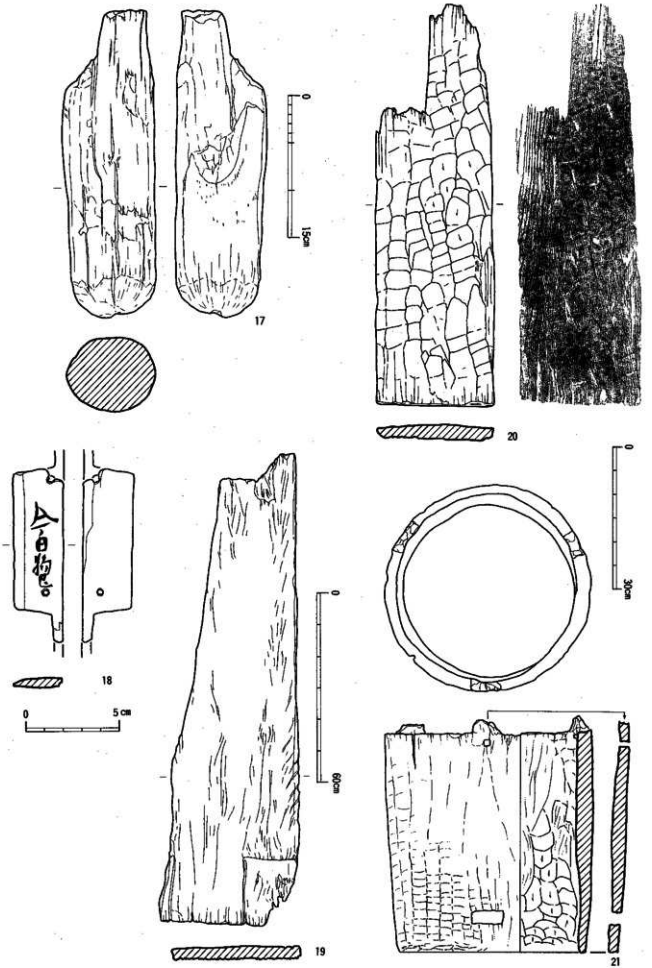
2点出土した。いずれも土師質であり、細片である。5は底部破片である。内外面ともに回転ナデ調整が行われる。釉は淡緑色で、底面にも施される。胎土は淡橙色および灰褐色を呈する。Ⅶ区P49より出土。6は埦もしくは坏の口縁部である。器厚は3㎜と非常に薄い。釉は黄緑色であり、外面の釉は剝落している。胎土は淡橙色を呈する。Ⅶ区1号土坑より出土。

白磁（7・8）

3点出土したうち2点を図示した。7は碗の口縁部である。玉縁の幅は1.4㎝を測る。黄色味を帯びた灰色の釉が、胴部中ほどまでかけられる。胎土は灰色を呈する。Ⅲ区講堂跡基壇北側より出



第46図　出土木製品実測図①（1/3）



第47図　出土木製品実測図②（17は1/4、18は1/2、19は1/12、20・21は1/8）

土。8は碗の口縁部である。玉縁の幅は1.3㎝を測る。灰色の釉がかけられる。胎土は乳白色を呈する。Ⅱ区3トレンチの暗灰色粘質土より出土。7・8は、横田・森田（1978）の分類によればⅣ類となろう。

青磁（9）

3点出土したうち、1点を図示。9は越州窯系青磁皿である。底部を欠き、復元口径は15.0㎝を測る。淡茶褐色の釉がかけられるが釉薬は薄く、口禿がみられる。胎土は灰褐色を呈する。横田・森田（1978）の分類によればⅠ類となり、11世紀前半（北宋代）の年代が与えられよう。Ⅶ区1号土坑より出土。

磁器（10）

4点出土したうち、1点を図示した。10は伊万里染付小皿の口縁部である。胎土は乳白色を呈する。18世紀の所産であろう。Ⅱ区3トレンチの暗灰色粘質土より出土。

陶器（11）

3点出土したうち、1点を図示した。11は、小形の埦の底部である。復元底径3.2㎝を測る。黄色味を帯びた灰褐色の釉がかけられ、胎土は灰色を呈する。表面採集。（伊藤）

（註）横田賢次郎氏のご教示による。

参考文献

横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978

（4）木製品（第46・47図、図版23・24）

Ⅱ区1トレンチ出土木製品（1～6，8，11～14，18，21）

1は縦16.3㎝、横7.1㎝、厚さ1.4㎝。両面に同じ焼印を有す。焼印は「ひ」（文字あるいは記号か）を一辺7.0㎝前後の隅丸方形で囲んだ意匠である。両短辺の縁部から1.5㎝の位置に幅0.2㎝の圧痕が1条ずつ見られる。2は長径14.2㎝、短径12.7㎝、厚さ0.6～1.0㎝。全体的にややいびつな円形状を呈する。表面には年輪とほぼ平行に削り痕がある。円筒型曲物の底板か。3は現存長11.1㎝、幅8.3㎝。内面には斜め方向の刻み目が交差する。曲物の側板の一部か。4は現存長13.7㎝、断面はほぼ正方形で0.7×0.8㎝。先端部は斜め方向に削り出す。5は長さ22.4㎝、直径は、上端部で0.7～1.1㎝、くびれ部で0.7～0.9㎝、中央部で1.2～1.8㎝を測る。下端部は偏平で、長径1.8㎝、短径0.4㎝。表面には削り痕が残る。服飾具の一種の留針か。6は3片に分割しているが同一個体と考えられる。2片には直径0.3～0.5㎝の孔が貫通する。木片の現存長は10.0㎝、9.4㎝、3.7㎝で、直径は1.0～1.3㎝、1.3～1.7㎝、0.9～1.3㎝を測る。8は長さ38.3㎝、直径は上端部で3.2㎝、中央部で3.0㎝、下端部で4.2㎝を測る。上端部分、下端部分ともに多方向からのカットが行われ、直径0.6～0.7㎝の円形孔を有す。11は長さ7.2㎝、幅3.7㎝、厚さ0.6㎝を測る。中央部分に1.0×0.8㎝のほぼ方形の孔が穿たれる。12は長さ18.7㎝、幅4.1～4.5㎝、厚さ1.8～2.1㎝を測る。

断面は長方形。13は長さ20.9cm、幅3.0～3.1cm、厚さ0.7cm。上部左に半径0.2cm前後の孔跡がある。14は現存長13.7cm、幅3.3～3.5cm、厚さ1.9cm。断面はやや隅丸の長方形。表面に加工痕が残る。18は長さ7.0～8.0cm、幅2.6～2.7cm、厚さ0.5cmを測り、両端に長さ1.5cm、直径0.5cmの突起を作り出す。直径0.3cmの孔が2箇所貫通する。孔の間隔は5.5cm。表面に墨書文字を有す。「今日物□」と読める。21は1本の丸太材を刳りぬいて作られ、上部の直径44.0cm、下部の直径39.4cm、高さ46.4cm、厚さ1.6～3.0cmを測る。上部には3箇所に突起があり、それぞれ6.2×2.8cmに復元でき、その直下に約1.2cm四方の方形孔がある。側面下部には2箇所の長方形孔（6.8×3.7cm）が穿たれる。内外側面の下部にはチョウナ痕が残る。井筒か。寺院の柱を転用した可能性がある。

Ⅱ区4トレンチ出土木製品（15）

15は長さ14.5cm、直径5.8cmを測る。側面半分に加工痕を有す。上部は多方向からのカットが施され、下部は斜めに切断される。

Ⅱ区木材集中地点出土木製品（7，10，16，17，19，20）

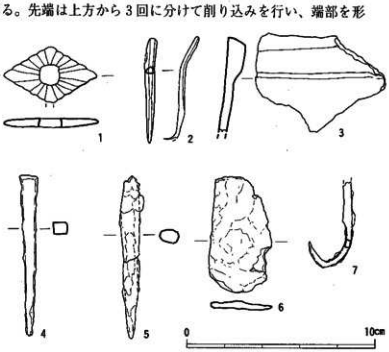
7は現存長13.8cm、長径1.9cm、短径1.6cm。10は現存長26.3cm、幅3.1cm、厚さ2.1cmを測る。断面は長方形。16は平部分は長さ6.2cm、厚さ0.7cm、握り部分は幅2.9cm、厚さ1.0cmに復元できる。周縁部は丸く作り出される。杓子か。17は現存長32.4cm、直径10.0cmを測る。下端部は丸くおさめられる。19は板材で、現存長148.4cm、幅40.4cm、厚さ4.8cm。角に10.6×8.6cmで、深さ0.8cmの長方形に復元できる削り込みがある。20は板材で、現存長164.8cm、幅25.2cm、厚さ3.2cm。片面にはチョウナ痕が見られる。19と20は寺院の建築部材の一部である可能性も考えられる。

Ⅶ区P10出土木製品（9）

9は現存長20.4cm、直径2.8cmを測る。先端は上方から3回に分けて削り込みを行い、端部を形成する。側面に削り込み時に誤ってできたと思われる削り痕を1箇所有す。杭か。

以上21点の木製品は全て樹種未同定である。なお、Ⅱ区木材集中地点より出土した加工木片を(財)九州環境管理協会に^{14}C年代測定を委託した結果、A.D.790±110の年代を得た。（中原）

参考文献　島地謙ほか編『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 1988、奈良国立文化財研究所『木器集成図録』近畿古代編 1985



第48図　出土金属製品実測図（1/2、1は1/1）

（5）金属製品（第48図、図版20）

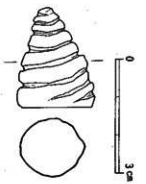
第49図　出土銅銭拓影（1/2）

1、2は青銅製品である。1は長径2.4cm、短径1.5cmの菱形で厚さは2mm。中心に1辺5mmの隅丸方形の孔があり、この孔の下辺面には径2mmの小さなくぼみがある。両面に沈線による模様が放射状に施されている。下端はまだ続いており、どのような形になるかは不明。装飾品の一部であろう。Ⅱ区包含層より出土。2は現存長5.5cm、幅5mm、厚さ3mmで、断面は台形。上部は屈曲し、下部は先細りして先端が跳ね上がる。Ⅳ区出土。3は鉛製品である。鍋の口縁部か。内外面に溶解物が付着している。Ⅶ区1号土坑出土。4～7は鉄製品である。4は釘で頭部は方形である。長さ8.4cm。Ⅱ区瓦溜より出土。5は刀子の茎部か。現存長8.5cmを測る。Ⅶ区土坑群包含層出土。6は現存長6.1cm、幅3.2cm、厚さ約3mmを測り、先端が少しめくれている。Ⅶ区土坑群包含層出土。7は釣針で頂部は欠損。現存高4.5cm、幅2.3cm、断面は方形で1辺4mm。かえりは無い。Ⅱ区瓦溜より出土。

（6）銅銭（第49図、図版20）

「寛永通宝」である。Ⅳ区包含層より出土。

（7）土製品



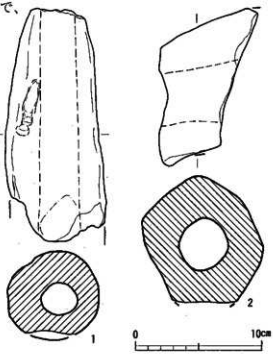
第50図　出土塑像螺髪実測図（1/1）

塑像螺髪（第50図、図版20）

高さ2.6cm、底径1.8cmを測る。沈線が左巻きの螺旋状で7重に施されている。底部は平坦に仕上げられている。大型の如来像の頭部に貼り付けられていたのであろう。胎土は緻密で、7mm大の砂粒が混入している。茶褐色を呈する。Ⅱ区瓦堆積より出土。

鞴羽口（第51図、図版20）

1は先端部で孔径2.6cmを測る。外面はナデ調整されている。胎土は砂粒を多く含み茶褐色を呈する。Ⅶ区3号井戸より出土。2は孔径4.0cm、胎土は粗く砂粒を多く含む。器面は火を受けたためか凹凸がある。外面は黒灰色、内面は赤褐色。溶解炉に付属するものではないかと考える。図示したもののほかにも同一個体と思われる破片があるが損壊が激しく接合し得なかった。Ⅶ区P114出土。　（村上）



第51図　出土鞴羽口実測図（1/3）

第Ⅴ章　その他の遺構と遺物

1．遺構

方形周溝（第52図）

Ⅶ区中央部、1号井戸の南東側で検出した。平面は隅丸方形で、北西隅は1号井戸に続く落込みで切られている。1辺は約6m。周溝は幅約1mで、断面はほぼ浅鉢状、炭や焼土の混じる土が堆積していた。方形周溝墓とも考えられ、中央部に設定したトレンチにより調査を行ったが主体部らしきものは検出されなかった。中央部は平坦で、全体が後世に削平を受けているものと思われる。北側の周溝内から大型の壺がまとまって出土した。これにより、この遺構の時期は弥生時代後期終末から古墳時代初頭頃であろう。　（村上）

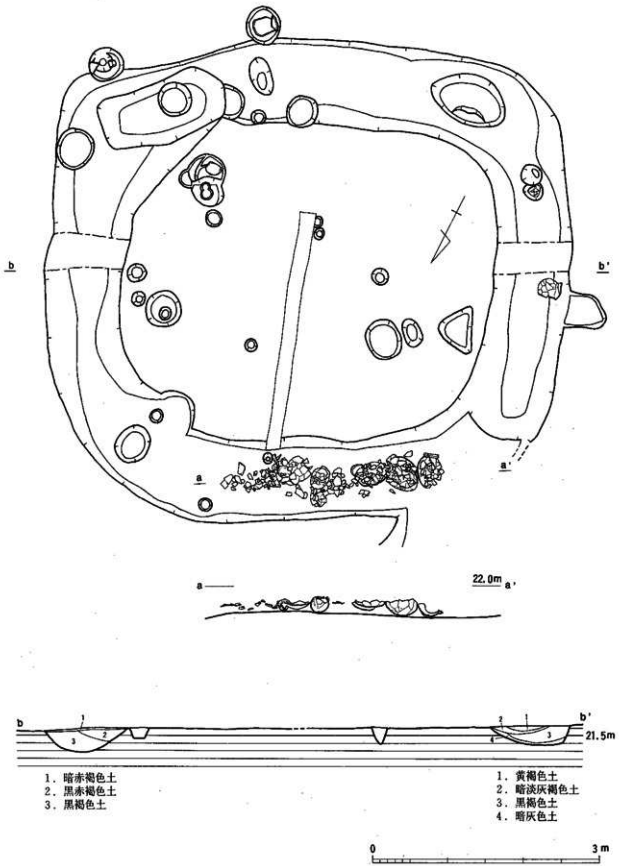
2．遺物

方形周溝出土土器（第53・54図、図版25）

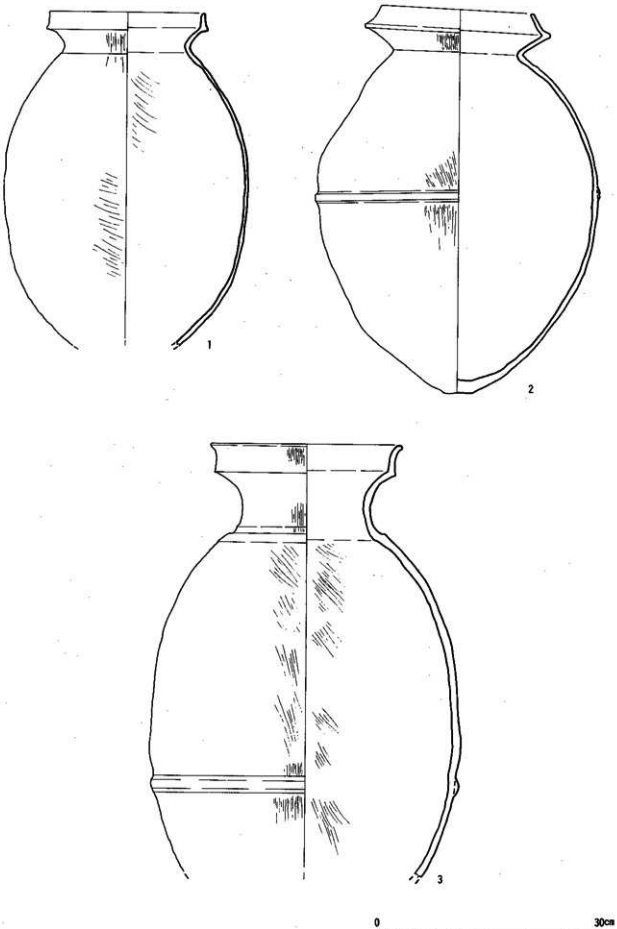
複合口縁壺（1～3）　1は口径20.6cm、現存器高44.3cmを測り、底部は欠損する。口縁部は直立外湾気味で、最大径は胴部のほぼ中位で32.4cm。内外面に刷毛目を有す。外面は淡茶褐色、内面は淡茶灰色。2は完形に復元でき、口径20.2cm、器高50.6cmを測る。口縁部はやや内傾外湾気味。最大径は胴部のほぼ中位で37.8cm。頸部はよくしまり、胴部との境が明瞭。胴部には断面台形の突帯が1条貼り付けられる。底部は小さく、平底に近いレンズ状を呈する。内外面に細かい刷毛目が見られる。色調は茶灰色で、外面の一部は暗灰色。3は口径25.4cm、現存器高57.0cmを測り、底部は欠損する。口縁部は直立外反する。頸部下と胴部最大径のやや下に、1条ずつ突帯を廻らす。最大径は胴部のほぼ中位に位置し、41.1cmを測る。体部内外面に刷毛目を有す。淡黄褐色。

壺（4～6）　4は口径15.3cm、器高29.3cmを測り、底部は丸底に近いレンズ状を呈する。最大径は胴部中位にあり、22.8cmを測る。口縁端部はやや平坦をなし、くびれ部は「く」の字に屈曲する。器壁は底部で2.0cm、胴部で1.0cm、口縁部で0.6cm前後を測り、概して厚い。内外面には細かい刷毛目が見られる。色調は暗茶褐色。5は口径12.3cm、復元器高34.0cmを測り、丸底である。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめられる。頸部には1条の沈線がある。最大径は27.1cmで、胴部中央やや上部。全体的に細かい刷毛目調整を施す。色調は淡茶褐色で、一部暗灰色。6は、口径12.0cm、器高13.4cmを測る。最大径は胴部のやや上部で12.0cm。外面上部に刷毛目を有し、内面はナデ調整。色調は淡黄褐色で一部黒灰色。

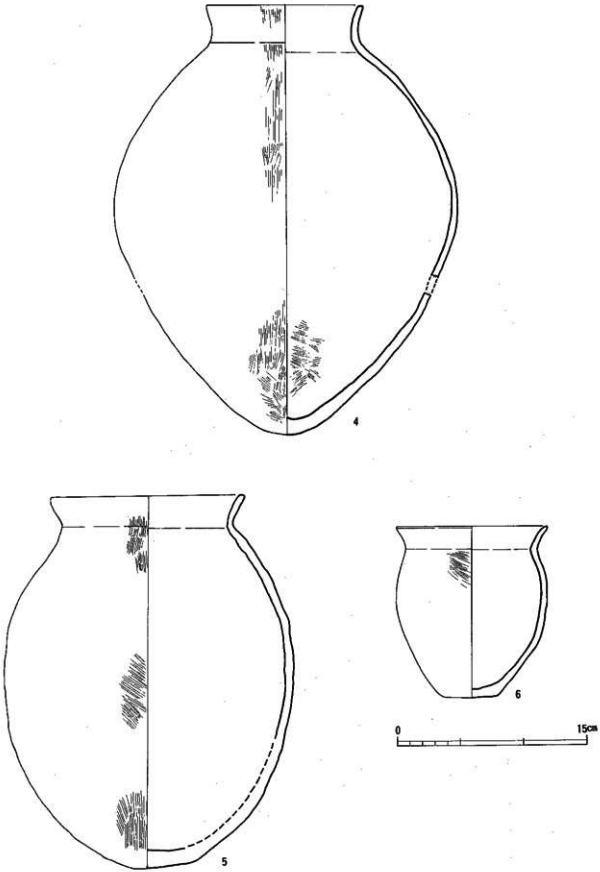
以上の6点のうち1～5は、北側の周溝内から一括して出土した。2点はやや浮き、3点は床面直上であった。土器は弥生時代後期終末から古墳時代初頭の所産と考えられる。　（中原）



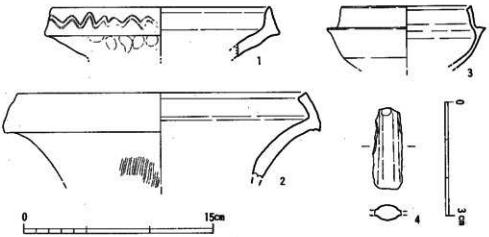
第52図　方形周溝実測図（1/50）



第53図　方形周溝出土土器実測図①（1/5）



第54図　方形周溝出土土器実測図②（1/3）



第55図　その他の遺物（1/3、4は1/1）

その他の遺物（第55図）

弥生土器

1、2は壺の口縁部でいずれも複合口縁。1の口縁部はほぼ直立し、復元口径17.2cm。外面に先端が二股になった施文具で波状文が施されている。屈曲部の下部に指頭圧痕が見られる。内外面にナデ調整。胎土は粗砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。Ⅱ区1トレンチ暗灰色粘質土より出土。2は口縁部がやや内傾し、復元口径23.0cmを測り大型である。内外面はヨコナデされ外面に縦方向の刷毛目が施されている。胎土は粗砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。Ⅳ区2トレンチより出土。

須恵器

3は須恵器の坏である。復元口径10.4cmで、受部は水平方向にのび、立ち上がりは薄く、内傾する。内外面は回転ナデ、外面の底部付近はヘラケズリ。灰色を呈する。Ⅳ区5トレンチより出土。

青銅製品

4は銅剣あるいは銅矛の身の部分であろう。残存長4.3cmを測る。脊のみの小片で翼は残っていない。脊の断面は楕円形を呈し、幅1.4cm。Ⅶ区包含層より出土。

（村上）

第Ⅵ章　小結

椿市廃寺の発掘調査は九州歴史資料館による３次にわたる調査に加えて、今回で４回目である。

これまでのトレンチ調査に比べると調査面積はかなり広いものとなったが、伽藍の中心部はほとんど未調査といってよい。こうしたことから、今回の調査で椿市廃寺の全体像の解明について必ずしも大きく前進したとはいえない。また、報告のなかでも調査不十分のままでの推測が多い。これらを検証し、修正していくことが今後の課題として残されており、そういった意味では今回の報告は椿市廃寺の調査の中間報告と位置づけられよう。

以下に今回の調査で得た若干の知見を整理して結びとするが、上記のような推定にもとづいたことが多いことを諒されたい。

寺院の伽藍について

講堂は北西隅部分で基壇を検出し、講堂の位置、規模等、前回の調査を追認する結果を得た。このことによって礎石の欠落はあるものの講堂跡が良く保存されていることが明らかになった。

金堂は前回の報告書『椿市廃寺』で想定されたものより、やや小さい東西55尺、南北50尺ほどの基壇規模を考えねばなるまい。前回と今回の調査結果から椿市廃寺の主要伽藍の配置を推定したのが第56図である。四天王寺式の伽藍配置の地割法については石田茂作氏が言及されている[1]が、椿市廃寺の場合はこれに合致しない面があり、このことをどう考えるかが今後の課題として残されている。

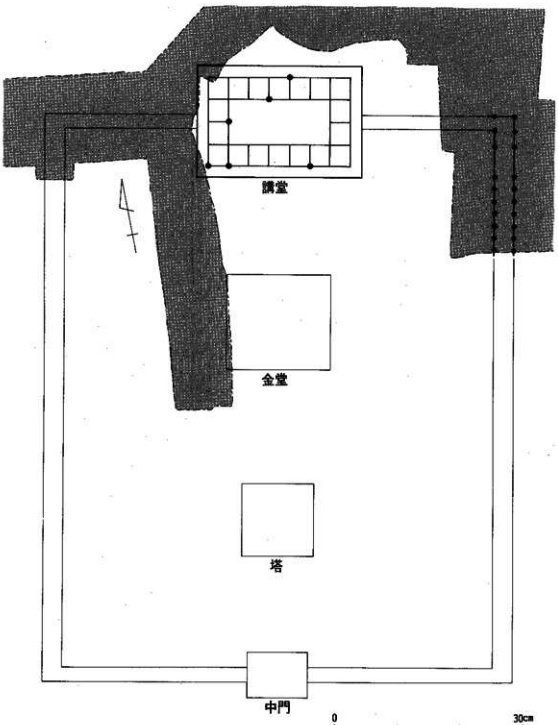
回廊跡は今回の調査で新たに確認した遺構である。西面回廊が未確認であることなど問題点が多いが、ここでは回廊跡として報告した。今後の調査でその性格が明らかになることが期待される。

また寺域内に寺院の伽藍と一部重複して複数の掘立柱建物跡が検出されている。なかでもⅠ区の１号、２号掘立柱建物跡は、比較的規模が大きく注目される。椿市廃寺に先行する在地の豪族の集落の建物跡であろうか。

出土瓦について

今回の調査では、第三次調査までに出土した軒瓦のうちⅡ類高句麗系軒丸瓦を除く４型式が出土している。これらの瓦については前回の報告書『椿市廃寺』にまとめられており、また軒丸瓦Ⅰ類については付編で詳述されているのでここでは概略を記すにとどめたい。

調査範囲の関係から今回出土した瓦の多くは講堂に伴うものと考えられる。講堂周辺から出土した軒瓦には軒丸瓦Ⅰ類、軒丸瓦Ⅲ類、軒丸瓦Ⅳ類、軒丸瓦Ⅴ類、軒平瓦Ⅰ類、軒平瓦Ⅱ類がある。なかでも軒丸瓦ではⅠ類（百済系単弁八弁軒丸瓦）が70％を占め、軒平瓦ではⅠ類（重弧文軒平瓦）が92％を占めて最も多く出土している。これらのことから講堂の創建時の軒瓦はこのセットであったと考えられる。わずかずつ出土しているその他の軒瓦はその後の補修に用いられたものであろう。また、今回、広範囲に講堂周辺を調査したにもかかわらず、軒丸瓦Ⅱ類（高句麗系）は一点も確認されなかった。このⅡ類は前回の調査では塔推定地の東側のＯトレンチの瓦溜から集中的に出土しており、あるいは塔などの特定の建物に使用されたことも考えられる。



第56図　椿市廃寺推定伽藍模式図（1/600）

椿市廃寺出土の軒丸瓦のうちⅢ類（複弁八弁蓮華文軒丸瓦）は平城宮出土の6284Ｆと同笵である。この6284Ｆは平城宮では708～721年頃の瓦とされている[2]。椿市廃寺出土のものは胎土・焼成が異なることから笵型の移動が考えられている[3]。

椿市廃寺の建立時期と建立者について

前回の調査では、寺院の存続年代を７世紀後半から９世紀代に想定している。今回の調査の出土土器は、８世紀代のものが最も多く、７世紀代に遡る資料は乏しかった。一方、10世紀以降になると遺物量が極度に減少する。これらのことから、椿市廃寺は７世紀末ないし８世紀初頭に建立され、９世紀頃までは存続していたと考えられる。

次に、この寺の建立者であるが、一般に白鳳から奈良初期の地方寺院の造立主体は、郡司などの在地の有力豪族と考えられている。京都郡では現在まで、椿市廃寺以外に初期寺院が見いだされていないことからこの寺の建立者も郡内最有力の郡司級の豪族と考えて大過あるまい。

第Ⅱ章でも述べたように６世紀から７世紀初頭までの京都郡の首長の拠点は、勝山町黒田周辺であろう。黒田地域の首長墓群の規模は豊前地域の他の古墳を圧倒しており、この地を拠点とする豪族の影響力は７世紀の前半頃までは郡域を越えて、豊前地域に広く及んでいたと考えられる。

一般に古墳時代からの有力豪族が郡司に任命されることが多く、黒田地域の豪族は京都郡司の有力候補といえる。しかし、椿市廃寺が黒田の中心地域から北に４kmほど隔たった地に建立されていることはやや不自然とも思える。黒田地域の豪族がその拠点を移動したのであろうか。

京都郡の郡司としては、椿市廃寺の創建期からやや遅れるが、『続日本紀』の聖武天皇天平十二(740)年九月条に藤原広嗣の乱に際し、兵五百騎を率いて官軍に帰順した京都郡大領外従七位上桔田勢麻呂の名が見える。彼はこの功により、外従五位下に叙位されたことが翌、天平十三(741)年閏三月条に記されている。この記事には桔田勝麻呂と記され、名前の表記に違いがあるが、正しくは桔田勝勢麻呂であったらしい[4]。(勝は村主の意で渡来系の姓といわれる)

この論功行賞から、広嗣の乱における桔田勝勢麻呂の功績が中央で高く評価されたことがうかがえる。平城宮の軒丸瓦の笵型がもたらされたのも、この時の功績と関係するのかもしれない。この推測が許されれば、笵型がもたらさたのは741年頃と考えることができる。またこの大領桔田勝麻呂の一、二代前の人物を椿市廃寺の建立者と考えてもよいであろう。[5]

さて、この京都郡の大領桔田氏は黒田地域に拠点を置いたの豪族の系譜をひく氏族なのであろうか。『日本後紀』の延暦十八(799)年二月乙未条に豊前国宇佐郡桔田村とみえ、桔田氏はこの地を出自とする豪族とも思われ、必ずしも両者を同一の系譜と考える必要はないと考えられる。

こうした７世紀から８世紀におけるこの地域の豪族の動向を考える資料は現時点ではまだ少ない。いまだその位置が特定されていない京都郡衙や豪族の居館跡などが調査されていくなかでこれらの問題も解明されていくであろう。

註（１）石田茂作「四天王寺式配置伽藍の地割法に就いて」『佛教考古学論攷」一 1978

（２）奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」12 1985

（３）山崎信二「平城宮・京と同笵の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」1994

（４）岩波書店版　新日本古典文学大系13『続日本紀』二　補注13参照 1990

（５）山崎信二氏は前掲（３）で造立氏族に上三毛郡塔里戸籍にみえる調氏を想定されている。

付　編

椿市廃寺出土の単弁八弁軒丸瓦

報告でⅠ類とした軒丸瓦は、通常、百済系単弁八弁軒丸瓦と呼ばれている。48点の出土量があり、百済系単弁軒丸瓦を出土する遺跡としては最も出土量の多い遺跡の１つと認めて良いだろう。椿市廃寺出土の百済系単弁軒丸瓦は、瓦当の中房が弁区より一段高く、蓮弁の先端は尖り気味で強く反転し直立する外縁に一重の圏線をめぐらせている。丸瓦部凸面には斜格子目の叩打を施すが、丸瓦部を残す資料の大部分は叩打痕をすり消している。凹面には竹状模骨が用いられた痕を残しているなどの点をこの軒丸瓦の特徴とすることが出来よう。軒丸瓦出土総点数56点の85％の出土率を占めているから、二重弧文軒平瓦とともにこの寺を代表する軒瓦であることはまちがいない。

報告では、Ⅰ類をａ・ｂと笵傷の有無によって分類している。笵傷のあるｂは、ａに比較して間弁の隆起が高くａを彫りなおしたものと考えられる。この傷から、犀川町木山廃寺との同笵関係が報告されている(1)。小田富士雄氏が周縁が一重圏(Ⅱ類)で、弁の先端が丸く大きく豊満な感覚を盛ったもの(Ｂ類)と分類された弥勒神宮寺・垂水廃寺・友枝瓦窯・豊前国分寺などの出土例(2)の中には椿市廃寺出土の百済系単弁軒丸瓦も含まれており同文瓦と考えて良い。さらに、亀田修一氏は、百済系軒丸瓦の蓮弁の分類のなかで弁端湾曲反転形のＢｂ類に椿市廃寺出土例を組入れて、福六瓦窯・木山廃寺・船迫堂がへり瓦窯・上坂廃寺出土例などを同文瓦とする(4)。これ等の遺跡はいずれも古代豊前地方の寺跡や生産遺跡であり、同笵とは限定出来ないまでもかなりの広範囲にこの種の軒丸瓦が用いられている。

九州で出土する百済系単弁瓦は、小田氏が指摘するように畿内地方の百済系軒丸瓦と比べてやや異なった特徴がある(3)。この文様の特徴から小田氏は九州の百済系単弁瓦の文様を百済末期の様式を受継いだものとし、百済から直接に九州にもたらされたのではなく、いったん畿内を経由したものとされた。さらに、九州の百済系単弁瓦の祖形として飛鳥の坂田寺の軒丸瓦を想定された。その論拠は外縁の重圏文である。(九州の百済系単弁瓦には通常、直立する周縁に重圏文が配置される)畿内で重圏文を周縁に採用する瓦当文様は山田寺式軒丸瓦（641年以降）である。

また、小田氏は、これに先立つ論証のなかで百済系軒丸瓦を出土する22遺跡を紹介し、周縁の重圏文の数で素文縁から三重圏文縁までの４種に唐草文縁を加え５種に分類し、蓮弁の形態を３つに分類した。この周縁の文様と蓮弁の特徴との組合わせと、さらには百済系単弁軒丸瓦と組合う軒平瓦との関係などを基礎とした編年を考えられた(2)。この編年は『日本書紀』の天智４年（665）の大野城・基肄城の着工記事を上限とするもので、下限を四王寺山出土瓦に置いている。その論拠は宝亀５年（774)、四王寺山に「四天王埈像が安置」(『類聚三代格』）された記事にもとずくもので四王寺山出土例はそれ以降の軒丸瓦とおさえられた。この編年については、大野城跡の発掘調査がその後進んだこともあり、全面的に賛成をすることは出来ないが、今日までの百済系単弁軒丸瓦の年代観の大きな指標とされている。編年表では、椿市廃寺出土例は上坂廃寺・友枝瓦窯・垂水廃寺・相原廃寺・法鏡寺などの出土例とともに710年を前後する時期に置かれている。年代観については、この他に『椿市廃寺』の報告書では、石松好雄氏は７世紀末から８世紀初頭の年代を与えている。これは竹状模骨に関する小田氏の論考(6)に根拠を置いたものである。また、亀田氏は弁端湾

曲反転形（椿市廃寺を含む）の展開する時期を大宰府系古瓦が国分寺造営に伴って展開する以前のものとして7世紀末から8世紀前半の年代を与えた[4]。椿市廃寺出土百済系単弁瓦の年代観は、以上のものが代表的なものであろう。（今回の調査でも百済系単軒丸瓦の決定的年代を示す資料は得られていない。）

椿市廃寺の百済系単弁軒丸瓦は、竹状模骨（花谷浩氏は「側板連結模骨」と呼ぶ。）によって製作された行基式丸瓦をとりつけている。1973年に竹状模骨を発見し[6]、命名した小田氏は、1974年には、法鏡寺・野森瓦窯・山田瓦窯・福六瓦窯にその例を見い出し、法鏡寺出土の百済系単弁瓦と竹状模骨の丸瓦が1つの軒丸瓦であることをつきとめた[3]。以後、この瓦当と丸瓦の関係は、発見例が増加し、1987年の亀田氏の論文では13遺跡を数えている。この時点ですでに竹状模骨と百済系単弁瓦との強い関連性があることは一般的認識となっていた。1995年の花谷浩氏の論文では、九州の竹状模骨丸瓦出土遺跡数は16遺跡が数えられている。

花谷氏は、1991年の飛鳥池遺跡の発掘調査で畿内にも竹状模骨丸瓦が発見されたこと、さらにその後発見例が増加し5遺跡が知られ、播磨にも1例があると報告している。その報告によると畿内で竹状模骨丸瓦を出土する遺跡で、軒丸瓦の丸瓦部がそれであるものは重弁蓮華文軒丸瓦と複弁蓮華文軒丸瓦の二種であり、この軒丸瓦に組合う軒平瓦は三重弧文軒平瓦に限定出来ると言う。さらに竹状模骨丸瓦の使用された時期は、対応する軒丸瓦の年代観と出土遺物の状況から、7世紀中頃に出現し7世紀第4四半期までで終わるものであると言う[5]。このことから、竹状模骨丸瓦を軒丸瓦に用いている九州と畿内との軒丸瓦と、それと組合う軒平瓦の関係でも違いがあることがわかる。さらに、細部では、叩打具の違い、連結される模骨の側板数の違い、綴じ紐の間隔や条数の違いなどが指摘されているが、問題とすべきは、九州と畿内で出土する竹状模骨丸瓦がどのような関連性を想定し得るかと言う点にある。花谷氏は、小田氏が九州の百済系単弁軒丸瓦の祖形として坂田寺出土の5型式をとりあげた見解を妥当なものとする。従って九州の竹状模骨丸瓦は畿内から伝わったもので、天智4年（665）の大野城・基肄城築城が契機となったとする。以上が花谷論文の主要な点である。花谷論文に対しては、竹状模骨丸瓦の成立に関して、那珂遺跡竪穴住居215の竹状模骨丸瓦[7]や、大野城市月ノ浦1号窯の竹状模骨丸瓦があり[8]、その年代観からは、ただちに畿内からの伝播をうなずけない。

本論のねらいは、椿市廃寺出土の百済系単弁軒丸瓦の位置づけにある。ここまで、椿市廃寺出土の百済系単弁軒丸瓦のもつ特徴と、それについて今日まで研究者が考えてきた系譜や年代論について紹介してきた。ここで問題なのは、椿市廃寺の百済系単弁軒丸瓦の生産工房や工人についてである。すでに、この点について亀田氏は、竹状模骨丸瓦と百済系単弁軒丸瓦の関係は、同一ないし同一系統の瓦工集団の生産品と見ている。椿市廃寺の百済系単弁軒丸瓦と同笵と考えられる資料は少ない。この軒丸瓦は笵型に特徴を残さない共通性がある。同文瓦としたものいくつかには必ず同笵瓦を含むものと思う。

この点で、困難はともなうが、椿市廃寺出土の百済系単弁瓦の特徴を、瓦当文様の再検討や胎土分析などの手段によって的確にまず把握したいものである。出来うるならば、椿市廃寺出土の百済系単弁瓦の生産窯が確認され、調査されることが一番この問題の解決に近づく道であろう。瓦当文様が良く似ていながらも、つい最近発掘調査された築城町の「船迫堂がへり窯」[9]で焼かれた百済系単弁瓦は、高尾栄市氏や村上智恵子氏の比較検討結果では微妙な相違があるという。

今後の課題として、豊前地区で出土する百済系単弁瓦の生産遺跡やそれを使用した寺跡からの出土瓦を、より広域的に瓦当文様相互の比較検討や胎土分析などの手段を通じて見極める必要があるものと思う。

椿市廃寺出土の百済系単弁瓦をはじめとする豊前地区の百済系瓦は、北部九州における仏教文化（寺院の建立事業）の初現を知るうえで重要な問題を提起していると考えるからである。

（栗原和彦）

註（1）行橋市教育委員会『椿市廃寺』1980

（2）小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その一」『九州考古学研究、歴史時代篇』学生社 1977

（3）小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究、歴史時代篇』学生社 1977

（4）亀田修一「豊前の古代寺院跡」『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎出版 1987

（5）花谷浩「丸瓦作りの一工夫」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論集　同朋舎出版 1995

（6）小田富士雄他『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡　大分県宇佐市における古代寺院の調査』大分県文化財調査報告26輯 1973

（7）『那珂2　那珂遺跡第13次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告第222集 1890

（8）『牛頸月ノ浦窯跡群』大野城市文化財調査報告書第39集 1993

（9）高尾栄市『堂がへり窯跡群現地説明会資料』築城町教育委員会 1996

図　版

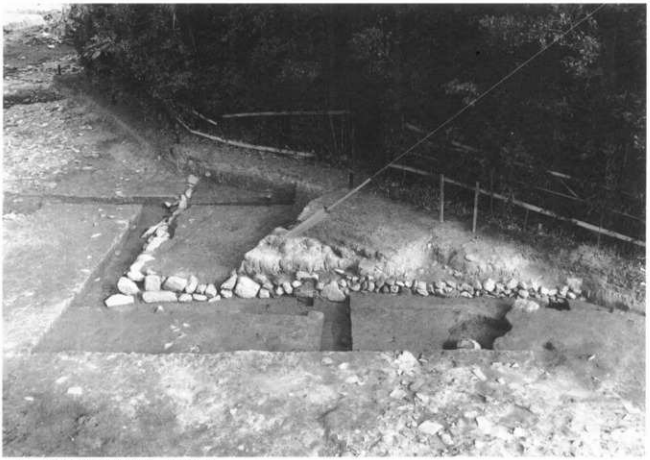
1．願光寺（南から）

2．塔心礎（東から）

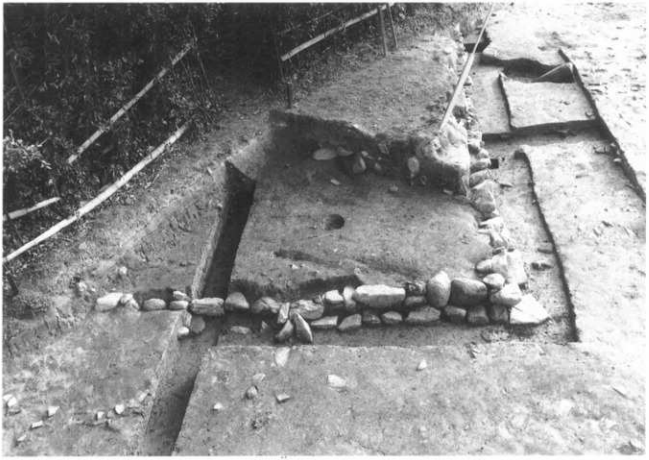
3．講堂跡北側調査前状況（北から）

1．椿市廃寺寺域周辺（東上空から）

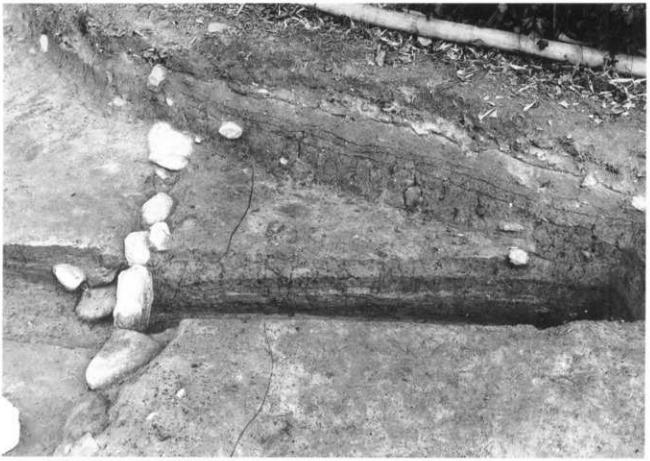
2．調査区全景（南東上空から）



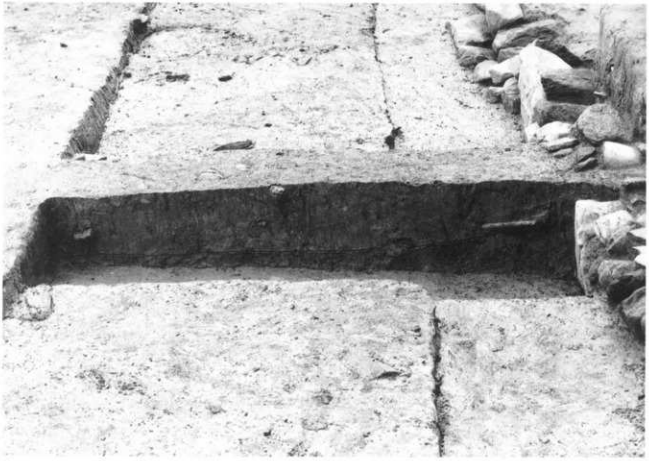
1．講堂基壇北西隅部（西から）



2．講堂基壇北西隅部（北から）



1．講堂基壇北側土層断面（西から）



2．講堂基壇西側土層断面（南から）

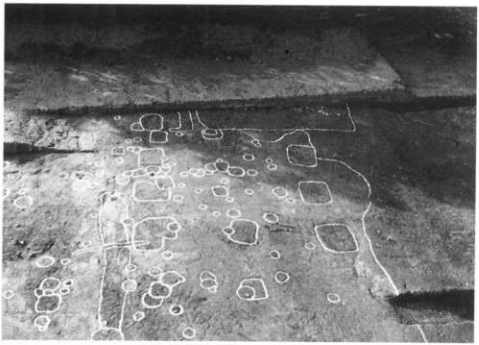
1．講堂跡北側瓦堆積状況
（北から）

2．講堂跡北側木材出土状況
（北から）

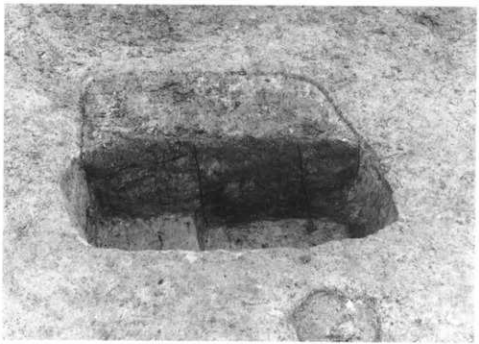
3．Ⅲ区１トレンチ東壁土層断面（西から）

1．回廊跡（北から）

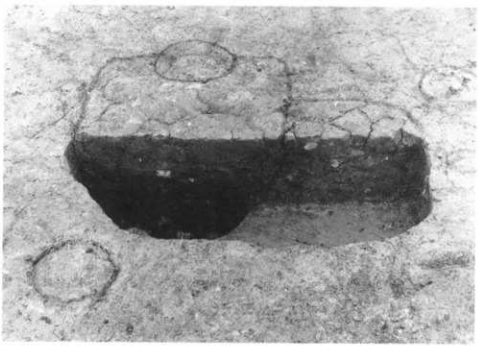
2．回廊跡（東から）



1.　1号掘立柱建物跡（東から）



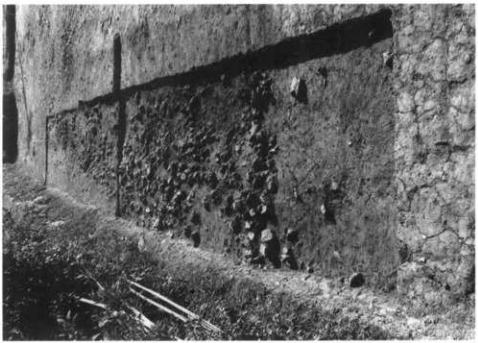
2.　1号掘立柱建物跡Ｐ３土層断面
（南から）



3.　1号掘立柱建物跡Ｐ５土層断面
（南から）

1．Ⅳ・Ⅴ区調査区全景（北から）

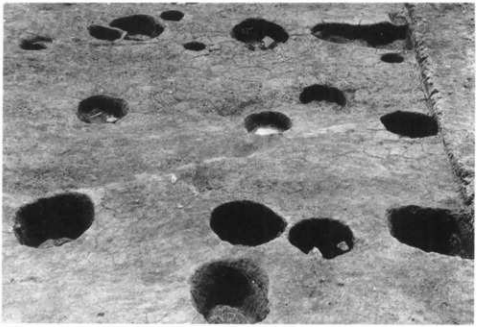
2．4号掘立柱建物跡（北から）



3．Ⅳ区1トレンチ（北から）

1．Ⅶ区調査区全景（西から）

2．Ⅶ区調査区全景（南から）



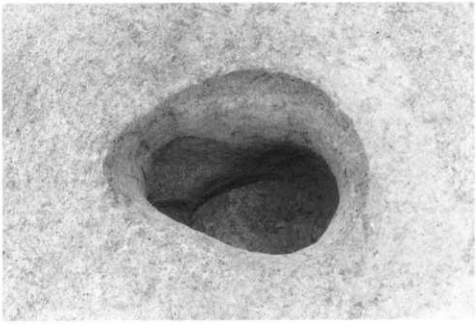
1．　5号掘立柱建物跡（北から）

2．　5号掘立柱建物跡P 8 遺物
出土状況（西から）

3．　5号掘立柱建物跡P 4 遺物
出土状況（西から）

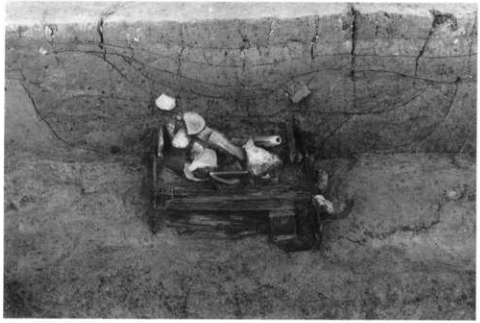
1．1号井戸（南から）

2．1号井戸（東から）



3．2号井戸（東から）

1. 3号井戸・1号土坑（南から）



2. 3号井戸土層断面（南から）

3. 3号井戸井戸枠（南から）

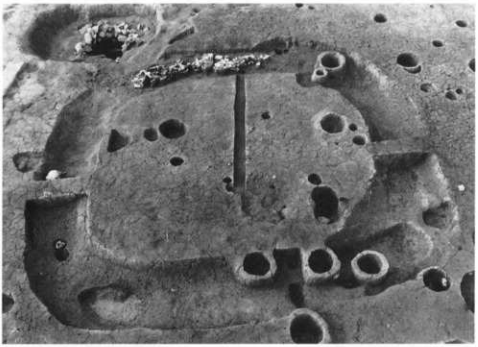
1．土坑群（南から）

2．7号土坑（南東から）

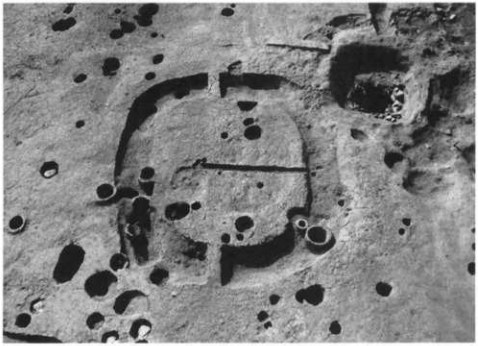
1． 20号土坑（東から）

2． 20号土坑鵜尾出土状況

3． 20号土坑完掘状況（南から）



1．方形周溝（南から）



2．方形周溝（東から）

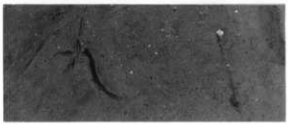
3．方形周溝遺物出土状況（北から）

1

5

4

7



6

2

軒 丸 瓦

1

2

26-1

5

6

3

4

26-2

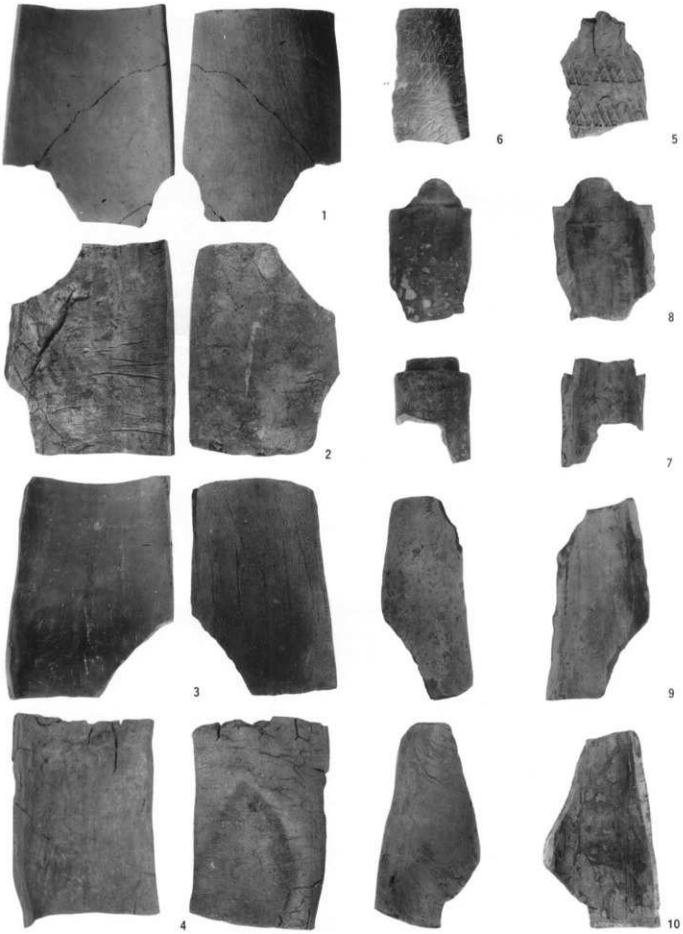
7

9

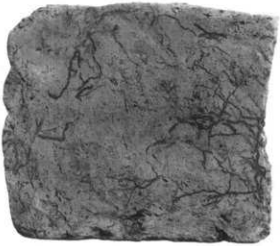
10

8

軒 平 瓦



平瓦・丸瓦



1

2

3

5

4

6

7

8

9

鵜　尾

10

11

金属製品

銅銭

塑像螺髪

鞴羽口

その他の瓦類・金属製品・銅銭・土製品

Ⅱ区出土土器

Ⅲ区出土土器

Ⅶ区１号井戸出土土器

Ⅶ区３号井戸出土土器（１）

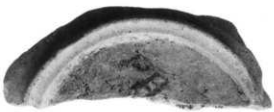
Ⅳ区出土土器

土　器（１）

Ⅶ区 3 号井戸出土土器（2）

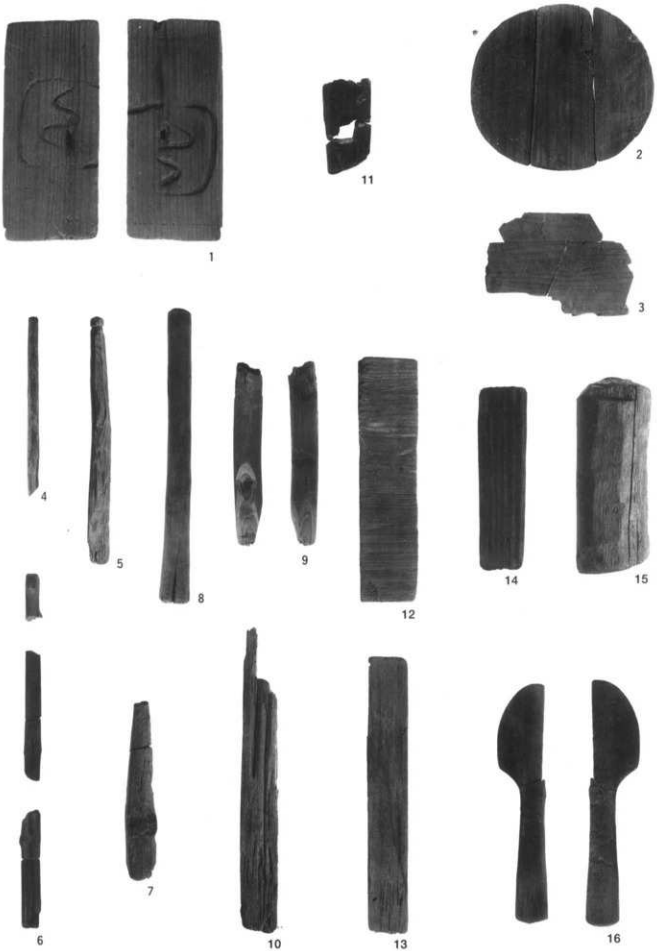
Ⅶ区 1 号土坑出土土器

Ⅶ区土坑群出土土器



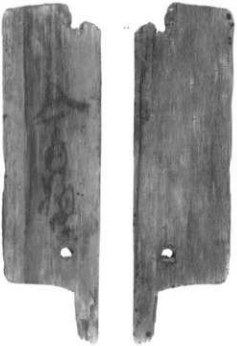
墨書土器

土　器（2）



木製品（1）

17



18

20

19

21

木製品（2）

1

2

3

4

5

方形周溝出土土器

報告書抄録

ふりがな	つばきいちはいじ
書名	椿市廃寺 Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	小川秀樹・村上智恵子・伊藤昌広・中原 博
編集機関	行橋市教育委員会
所在地	〒824 福岡県行橋市中央一丁目1番1号 TEL 09302-5-1111
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
つばきいちはいじ 椿市廃寺	ふくおかけんゆくはしし 福岡県行橋市 おおあざふくまる 大字福丸	402133	140087	33° 44′ 25″	130° 55′ 18″	19920616 ～ 19921211	3,750	県営ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椿市廃寺	寺院跡 その他	奈良時代	寺院跡 講堂基壇 回廊跡 堀立柱建物跡 7棟 井戸跡 3基	土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器 輸入陶磁器、木製品 塑像頭髪、土製品 金属製品、銭貨 瓦（百済系、新羅系、平城宮系軒瓦、鴟尾）	7世紀末から8世紀はじめ頃創建された寺院跡。講堂基壇を再確認。回廊と考えられる柱穴列を検出。平城宮と同范も含む多様な軒瓦が出土。
		弥生時代後期末～古墳時代初頭	方形周溝 1基	弥生土器、土師器	

椿市廃寺 Ⅱ

行橋市文化財調査報告書

第24集

1996（平成8）年3月31日

発行 行橋市教育委員会

福岡県行橋市中央一丁目1番1号

印刷 奥田印刷株式会社